



標註
紫花物語抄
三





この巻ハ冷泉院崩
御のち三條天皇
位共普會のちより
道長公の子顯信の
出家のことなるとり
けり卷の名ハ秋の
ことばふり

御讓位即位 一條
天皇の三條天皇
位を譲りたまへる
なり百鍊抄三條
天皇寛弘八年十月
十六日即位世六と
あり

ねびとこのほり
成人たまへると
いふ

けりハ云々 推
くまて痔痛の

標注 榮花物語抄卷三



小中村義象

関根心直

標注

十日かけのかつら

寛弘八年六月十三日御讓位、十月十六日御即位なり。
さきくハ見ねハ知らば、こたみハいみじうめでたし。
帝もいみじうねびとこのほり、をくしうめでたくお
はしまし。かくて今ハ御襖大嘗會などおほやけ日た
くしの、大きなるふおぼしき日ぐまをりしもあは。
この頃冷泉院なやませ給ふといふ事こそいできた
とハ、世ふいみじき事なり。つねの御ありさまなれハ、
さりともけしうハおほしまさなどおほしたゆめ

榮花物語抄卷三

二

重らせたまふこと
ハあるまじと取安
心し居まじなり

うせさせたまひぬ
百鍊抄お寛私八
年十二月廿四日冷

泉院崩于南院
針
上とあり

だいたとも 侍
大嘗のちを太すと
もといへるこ

つるはこのうへ
ぬ和名抄唐韵云様
除雨反上声之重標
和名都流波美
實也これよて染め

年号のほりて 寛
弘九年十二月廿五
日改元あり

たれこめて云々
喪ふ意りたまひて
殿上の間みも出さ
せたまふと云ふとい
ふ

宮さち 敦明敦儀
敦平師のちの官
を云ふ

ど猶おぼつかなりとて、殿の御まへ参らせ給ひく見
奉らせ給へば、いみじう苦しげなる御けしきおおは
しまはをいかみくと見奉らせ給ふ程よ、十月廿四日、
うせさせ給ひぬ。あはせよ怒しなど、聞えさするもお
ろかななり。このだいたとも明年ふこそハあらめまづ
御さうそこの事なご、よろづよ大殿のみぞおきてつ
かひまつらせ給ふ。内よまご御かはりとおぼしめ
して、宮くふ御おくりせさせ給ふべうおきて申させ
給ふも、いみじう哀にめでたし。後々の御事ども、お
をもよめでたくせさせ給ふべし。世の中みま涼闇に
なりぬ。殿上人の、つるばみのうへのきぬのありさま
なども、からすなどのやうお見えてあはせなり。よろ

づ物のはえなくくちをともおろかななり。一天下の
ものなげきみしたり。よろづを志つくして、いまいふ
なるきはよ、かゝるものいできたるを、いといみじき
世間の大事あり。とうなく月日もすきて、年號かはり
てあくる年長和元年といふ。元三日のありさま、たゞ
あらまゝかバ、いりよめでたからまし。たれこめて殿
上よも出させ給はずなど、てくちを。かんの殿ハ
うへの御つぼねおぼしませど、ひるはいま、く
おぼしめされくわらせ給はず。宮さちの参らせ給
へる御有さまいとめでたし。さて世中よいけふあ
す后たゝせ給ふ程よとのいひ、かんの殿よやま
た宣耀殿よやとも申めり。かゝる程よ宣耀殿よ、うち

我身ひとつのあら
ずもあるうな昔
のまゝの志筆をの
さまふあらぬきの
こころなり

君まさぬ宿ふい
この歌抄千載集
の詞まゝも一条院
かくせさせたまひ

より、
妻かすく堅きまらんと思へとも、おぼつらなき
を隔てつるかた。ときこえさせ給へれば、御かへし、
かすむめる室のけりきハそれなから、我身ひとつ
のあらずもあるかた。と聞えさせ給へれば、おぼし
おぼしめさる。中宮彰子ふ八年さへつだりぬるを、盡せ
ずおはせお思へめされて、たゞ御おこなひよてす
させ給ふ。正月長和元十五日、一條院の御念佛、殿ばら皆参
らせ給へり。月のいみどりうすみのほりてめでたきに
ことはて、出させ給ふとて、殿道長の御まへ、
君まさぬ宿ふ八月ぞひとりすむふるきみや人と
ちもとまらで、このたまはすまば侍従中納言行成、

て後の妻人々世念
佛にまかり月のい
こゝろをそのほり
とるふまをてつ
侍るしてとあり互
おえ合せて時のさ
まゝあらんし
つらさめー司
よて御お對して
りあふふ友の進退
叙任をむふことお
り前ふもせり

あふことも云、
新古今集の初ま
一條院のつれたま
ひふたむきそのあ
まのこゝろおあげ
きこまひてあふお

こぞのけふこよひの月を見りとりよ、かゝらん物
と思ひかけきや。はかなくて、つかさめりのほどよも
なりぬまば、世よを、つかさめりとのしるも、中宮彰子
世中をおぼしいづる御けしきなれば、藤式部藤原、
雲の上をくものよそよそ思ひやる、月はかはら
あめのしたよそ。おはれよつきせぬ御事ともなりや。
宮彰子の御前かへす、おぼしなげかせ給ひと、犬のご
もりたる曉かたの夢、院一條のほのかよみえさせ給ひ
けまば、
あふことも今ハなきねの夢ならで、いつかハ君を
まゝハ見るべき。とていとごおん涙せきあへさせ給
へば、
三條三條内内にハ妍子かんの殿の、きさきふるさせ給ふべき御

のうふえたまひ
けといとありを全
まべし

ふさはしうらけ
不むねお招もふて
とく

日本記略この年正
月三日の条小云女
御藤原研子家可立
后之由室とも仍左太

事を、^{道長}殿ふたびく聞えさせ給へども、年頃ももならずせ
給ひぬ。官たちもあまう招をしまし、^{城子}宣耀殿こそ、まづ
さやうよいおはしまさめ。内侍の^{研子}かみの御事ハ、おの
づから心のどうよなど奏せさせ給へば、いとけうな
き御心也。この世をふさはしからば、思ひ給へるなり。
あど^愁怨の給はすも、さはよき目してこそハ、宣旨
もくださせ給べかなれと、そうして出させ給ひて、よ
はかにこの御事どもの御よういありたよるもそれ
ふさより、目などのべさせ給ふべき御世の有さまあ
らねば、二月十四日よ、きさきよるさせ給ふとして、中宮
ときこそえさす。いそぎた、せ給ひぬ。その日ふなりぬ
と、^常常の事なづらも、いみづくやむことなくめでた

以下参子場殿被
申慶賀と二月十
四日の条小云余
皇太后為大皇太后
官中宮為皇太后女
御正二位藤原の
研子為中宮と
ねよりり嫉むこと
よそ御念うること
こ
なつまけ かつ
のけのま、ま或
ちのの漢ならんら
およひ 指のす
指さしてといふこ
と之伊勢物語に
日記等よもこの詞
あり

し。年ごろの女房たち、上中下のほどななどのときがた
うおもひくわりつる程、ねたかりつる人々など、けふ
のきごみにはつかうげなる事ども多かり。何事も、心
くるうげふ、うちなつましげなりつる人も、限り
ありけむ、^唐唐きぬを着、年頃めでたり志た
りつる人も、俄よ、ひらきぬなどよて、いと心やましげ
ふ、思ひたるもをかしまさふ、さはいへどなほ宰相の君
などいふ人を、おとぎなどいひつけ給ひ、およびを
さしいひつむど、いとけざやかよ、えもいけぬ、えびぞ
めの織物の、からきぬなどを着てさぶらふよ、何くれ
の人も、心よく、思はせ、それはと思ひとりつるも、さ
しもあらすなど志なぐ、わき給へる程など、げよおほ

あこまいぬ 御子と柏犬との御帳の左右におきたるなり
おもやう 面様
てらほつき なうふ
くらふ あふみくれ
たること

やけとたせ給ひぬるはことなるわざなりけり。心
まは後もやまうらばいひ思へどもかくもえ啓せ
で心のうちよのむせわさるほども苦しげなり。又
さべき五位のむすめなどの、はぢなきほどなりつる
を藏人などよて、おもひの参らすまうなひとつぎ
などして、うたてゆくき事どもをいひ思へど、つま
なくもてなしたるもいとほしげなり。宮の御前、志ろ
き御よそひよて、大床子よ御ぐしあげておはしまし
御帳のぞばの志、こまいぬの顔つきも、おそろしげ
なり。御前の御ぐしあげさせ給へる程、いとぞめ
でたりおはしましける。もとより御おもやうの、ふく
らかよをかしげよおはしますものから、せよめでと

大さきや 火焼屋
なり

くおはしましける。猶さるべうおはしましなりけり
とこそハ見奉りけき。御歳十九ばりよぞおはしま
しける。参らせ給ひく、三四年ばかりよぞ参らせ給ひ
ぬらんかしとぞおしはうりまうす人あり。大官は
十二よて参らせ給ひて、十三よてこそ后よゐさせ給
ひけき。さきよ此御前ハ、すこしおとなびさせ給ひよ
けり。御前よ火たきやす急陣屋つくり、吉上のこゝろ
しげよ、いひ思ひたるかほけしきよりことおこりて、
さぶらひの長ともなさせたまひさまあごことしけ
ふ見えたり。やがて大饗いと疾うせさせ給ふべし。大
夫よハ大殿の御はらからの、よろづの兄きみの大納
言なり給ふ。おほか宮つかさなど、皆えりたまさせ給

ふかくていとめでたう、二ところきつてきておは
しまはを世のためしに、めづらうなることに聞えさ
す。^{三條}うちよハ今ハ宣耀殿の女御の御ことをいかにか
とおほしめせど、すうやうも殿よは申させ給はぬ程
ふ、宣耀殿よはなふともおほしめたらぬ、大りこ
の女房のえんくよつきて、さと人の思ひのまゝにも
のをいひおもふハ、いらふくおまへよ思おはしま
すらん。あさましき世申ふはべりや、これけさべきこ
とかはなご、いとさかしかほよ、とぶらひ参らす人
人などあるを、此ふみをも又かうなんそれかれハ申
つるなど語り申す人を、女御殿ハなごのかうむつか
しういふらん。たとひいふ人ありとも語らでもあれ

まらやう、ハツキ
りて、おらうよこ
のめ、おせらまぬ
おんや

さうらうは、さう
ハ賢なる賢
さうか、おつさる
さうら

かしこ、よはよろづ思ひたえて、今ハたゞ後の世の
有さまのまことそわりなけれなど物まめやうよおほ
せらるも、バ、さこそあれ御心のひがませ給へれば、物
のあはれありさまをもちらせ給はぬと、さうしうぞ
まこえさせける。の、る程よ、大^{道長}殿の御心、何こともあ
さまよきままで、人の心のうちをくませ給ふよより、内
ふちむく参らせ給ひて、こらの宮たちのおはしま
すよ、宣耀殿のかくておはしまは、いとふびんなるこ
とよ侍り。はやう此御事をこそせさせ給はめと奏せ
させ給へば、^{三條}へこ、おもさは思ふを、この殿上のを
のことものむかし物か、りなどおのくいふをきけ
を、内舍人などのむすめも、むらうは后よ居けり。今も

内舍人、門閤の子弟
より取るものよそ

大守令ふも九十人
と定員とせらざた
りこれハ帯刀にて
宿衛し行幸の厨
後と護衛しその他雜
使も供まきと職
とまものなり

神ことあらん云々
神ことあらん
目を除きて能るべ
く一き目とえらこ
てなり

辨 左右の弁友の
りあて太政官の友
貞

修理大夫 修理職
の長官なり

中ころも、納言のむすめの后に居たるなんちきなど
いふをば、いりゝハすべからん。とこそきけとのたま
はすまば、それいひがことと候なり。いりでか、さらば
故大将をこそハ贈大臣の宣旨をくださせ給はめと
奏せさせ給へば、さきやうにおこなひ給ふべし。と
の給へすれば、うけ給はらせ給ひて、官におほせり給
はす。さき神ことあらん目をなちて、よろしき日
して、小一條の大将をせごうの朝臣、贈太政大臣とな
して、かのはり、又宣命よむべしとの給はすまば、辨う
け給はりぬ。四月、さきとこらぐの祭はて、よき
日して、かの大將の御をか、勅使くだりて、やがて修
理大夫そひても、ものすべくあれば、かの君も出たちま

いみじきものふ云
云 宣耀殿の芳子
女御と村上帝の妃
たまひて愛したま
ひよりいひあそ
まふ女御の位ふ
て止まふきといへ
るなり
志多もの 藤若ふ
て物の理のつら
ぬことと洛下馬車ナ
人といふは、この
之帝の御子とも似
合いねば、このき
は、中より云とい
へるなり

るり給ふ。よき御子もたまひて、故大将のかくさうゆ
き給ふをぞ、ふの人めでたきことと申ける。の御い
もうとの宣耀殿の女御、村上の先帝のいみじきもの
と思ひ聞えさせ給ひけれど、女御よてやみ給ひよき。
男官一人生給へり。のども、その官か、こき御中よ
り出給へるとも見え給はず。いみじき志多ものよて
やませ給ひよけり。その小一條のお師の御うまご
よて、この宮のかうおはしまし事、世にめでさきよ
申おもへり。さて四月廿八日、きさきよあさせ給ひぬ。
皇居宮と聞えさば、太夫などよへ望む人もことよな
きよ、やさやうのけしき、やきこしめけん。故、白殿
のいづもの中納言なり給ひぬ。宮つかさなどき、ひ

きくふくさき
城子立居の馬子と
あまうらわしき
みいさきとつふ

望む人なく、物をなやかまなどこそなけき。よろづた
ど同じことなり。これよつけても、おなめてたや、女の
御幸ひのためしよハ、此宮をこそし奉らめたど、き、
ふくきまでせよハ申す。まづハ大殿もまことよいふ
じかりける人の御ありさまなり。女の御幸ひの本よ
ハ、この宮をなんし奉るべき。親などよも後き臨ひて、
こら御身ひとつみて、年頃ふあり臨ひぬるよ、又けし
からびびんあきま志いで臨はば、まづハこ、らおほ
くおはする宮たちの御をかよ、志れもの、まじらぬ
よてきはめつかし。いみじき村上の先帝と申し、か
どかの大将の妹の宣耀殿の女御のうみ臨りしハ
宮こそハ、世の志れもの、いみじきためしよ。それよ

志れつうなまき
志れい癡れくうと
くあきま福園な
るるなり

教明教儀教平師明童子三
此宮たち、五六人おハするよ、すべて志きかたくなし
きがなきなり。なごどこそハ申させ給ふよ、まいて世に
人ハ、聞よくきまてぞ申ける。今ハ小一條いかで造り
たでんとおほしめ、三條帝も今ぞ御ほいとけたる御心
ちせさせ臨らんかし。かく業よめてたき御ありさま
なまごも、城子皇居宮よハたごおほつうなきをのみこそ
ハ、つきせぬ奉よおほしめすらめ、同じ御心よおほほ
しめしけん内三條より、
ふちハへておほつうなきをよと共よおほほめく身
とも知ぬべきかな。とある御かへしよ、
露はかりあハれを志らん人もがな。おほつうなき
をさてもいりよと、萬の中よも、常子姫宮の御ゆかしきを

おまけ 殿と
成長せらるるをい
ふ

衣がへ云々冬ふ
りたる衣のま
の月日のゆき
ふむむむむむ
とこたむ月を
ん月ふて望月を
ふ

を思召ける。大宮皇子は八院一條の御服なども果したまはつ
きせずのみ思しなげかせ給ふ。春宮敦成のうつくしうお
よすけさせ給ふをあけくれ見奉らせ給はぬもあハ
れよくちをうおほさるゝよ三の宮敦良のいみじう美
くしうまぎきありかせ給ふにぞすこしおほしなぐ
さめけるはうな長和元年秋ハ過て冬も来ぬまハ内日た
りハ中宮妍子の御かこの衣がへなどありさまも物け
ざやかよ月日のゆきゆほど知られてめでた
りける。たゝむ月の大嘗會御禊などいみじう世よ
そきたちよたり。内三條も御服たちぬる月よぬがせ給
ひて、冷泉院の御十月廿はてもせさせ給ひて、今ハ此ことを
いみじきことよのゝ志らせ給ふ。女御代にハ、大殿の

志さま 為標よて
車の飾りまを
いふのまを
驚くほど美標ふ
まのこころ以下
ちその車ともの
さりのまをける
なり

道長三女 威子
内侍のかんの殿出させ給ふ。女御代の御車廿両ぞあ
るをまづ大宮皇子よりみつ中宮妍子よりまこつ、車よりはトめ
て、いといみじうのゝ志らせ給ふ。こたみの物見よハ、
此宮この御車なんあべきとのゝしきバ、いつか
人まち思へるよ、今ハその日ふな望て、女御代の御車
の志さまより始め、あさましきまをせさせ給へり。そ
の車はありさまいへば愚なり。あるハ屋かを造り
て、檜はだをふきあるハもろこしの船形を造りて
乗り人のそでなりより始めて、そまよやがてあはせ
たり。袖よハおきくちよて、まき志を志た里。山をたゝみ
海をたゝへずちをやりす系て、おほかたひきわた
ていく程、めもこのやきて、えも見わかず成りか車

今行末も云く、
やうなる美濃の行
列を過ぎ、うら
更ふいんど行末も
決してあるまじき
ことなるべしと云
り、うらまは、は
るるうらあらんと
いふまじき
悠紀主基 大嘗會
の時小天神地祇ま
つらせたまふとて
物も不建てらる
神敏といふこれ

ひとつがきぬの敷すべて十五ぞ着たる。あるハ唐よ
しきなどをぞきさせ給へる。此世界のことも見え
ずてりみちて、わたるほどの有さま、おしはかるべし。
殿原君達の馬車弓やなぐひままでの有さまこそ、せよ
めづららぬまゝ見聞えぬ子どもなりけむ。過よしか
さいいはい。今行末もいかでか、るるはと見えたり。
冬の日もはらなくられて、大嘗會のいそぎさせ給
ふ。されどその日ハ只うるハしうぞある。悠紀の方ハ
大中臣能宣が子の祭主輔親つかうまつる。主基の方
ハ前加賀守源兼澄なり。此人と輔親はよしのぶの子
なればと思召したり。かねずみハ公忠の辨のすぢな
りなど思召して歌のかさふさもあるべき人どもを

初め悠紀主基の國
とト定してその國
司を任ふまつるこ
とをり此時ハ悠紀
ハ近江國依田郡主
基ハ丹波國天田郡
なりき

あてさせ給へるなるを。悠紀のかこのいなつきう
た。坂田のこほり、輔親、
山のこときかたの稻をぬきつみて、君かちとせ給
はつほよぞつく。御神樂の歌、おなご人、
大やま國志ろしめすは、よめより、八百萬代の神
ぞまももる。まゐり音聲、たかみくら山
萬代をたらみくらうらうこきなきときハかきはよ
仰くべきかな。樂の破の歌しき地、
大宮の志きちぞいとゞさかえぬるやへのくみ垣
つくりかさねて、樂の急のうたかなやま、
かな山よかたくなきせる常磐木のがずよおひま
すくよのとも草、よかて音聲、やすかハ、

すへらきのこよをまち出て水すめるやすのゆ波
のどけかるらし又つぎの日のまゐり音聲たゞらの
山、

あめつちのともふ久しき名よふりて、なつらの山
の長きみよかた。樂の破のうたふみづ、

吉水のよきことおほくつめるかな。大くらやまの
ほとをるかよて、樂の急のうた、

ゆふしでの日かげのかつらふりかけて、豊の明あかりの
おもしろきかな。まかて、音聲やすられさと、

もろ人のねがふ心のあふみなる、やすらの里のや
すらけくして、ま基の方、いなつきうた、おほくらやま

兼澄、

日づけのうつら
この歌ふよりてこ
の巻の名は起れり

二葉より大くら山よをこぶ稻としハつむとつ
くるよもあらじ。御神樂の破は歌ながむら山、

君ら御代たゞむら山の柳糸をやそうち人れかざ
しよのせん、辰の日の樂の破のうた、玉ねやま

天つそらあーこよをる、そしめふ、玉ねやまの
のげさへそらふ。おなじ日の樂の急のうた、いなふさ

山、
としつくり樂しるるべきみよなをばいなふさ山

のゆこつなりける。おなじ日まゐり音聲、さくといし
山

数志らぬさくといし山こつり、いはねとなら
むほどい幾よを、同ド日のまゐり音聲、ちとせ山、

うこきなきふとせの山ふいと、しく榮世そある
こゑのするかな。己の目のかくの破とみつき山、
君り代いとつき山のつきくよ、榮ぞまさんよろ
づよまでふ、おなじ目のかくの急の歌、なごむらやま、
番代をなごむら山のなごらへて、つきす運をんみ
つき物かな。同じ目れまあり音聲、らみのをがハ、
天の下とみのをがはの末なれば、いづとの秋うう
るはぎらるべき。おなじ目のまかて音聲、ちかかは、
濁なく見えろるかなち、川の、をじめてをめる
豊のあうりよ、此おなじをりの御屏風の、歌などあを
と、同ドすちのすなごバか、す。ごごよりして、いとこ
く言ちりつる事ども、はて、三條内よりあるのどり

こそよりして云く
大嘗会の子といふ

藤原云々、藤原
殿ち長保三年、小椒
景合、同四年、ふ豊
せらむしらはこ

とらぬぬけし
き懐妊の市けしき
をいふ

佛名 十二月、癸
申ま行ハせらる

ふ思しめさるゝもも兼家女 総子 中関白麗景殿、淑景舎あどの、おはせま
しかはと思し出させ給ふ。かくて中宮研子いっなるより、
例ならすあやましうおぼされけり。物あどつゆきこ
しめさぬハ、たゞならぬ御こ、ちよやと思しめすよ、
御めのとの内侍のすけ、あやしうたちぬる月、おぼつ
らなぐて、やませ給ひよし事などおおはしまはよや
と申給ふよ、まことよ、只ならぬ御けしきふおはしま
は、道長殿の御前にも、三條うちもいと嬉しき事におぼしめ
して、道長殿の御前何かものきこしめさずともおはしま
しぬべき御こ、ちなりとて、ふき日してさまぐお御
祈ともはどめさせ給ふ。志はすもなりぬ。世中心にあ
わたごう内三條よりはどめ、宮この御佛名も、例の佛

式にて光仁天皇
龜五年ふはしまり
しよし友曹等
ひきて河海抄ふ
へり
ある白雪と云く
選集不貫之年の内
ふつもれる花の
きくらししある
とあるふよれるな
り
あんとり云く
同抄ふ云く後取元
三所藥除夜籠人
其人元日四位二日五
位三日六位まじり
次第ふ云く女官移
入内酒蓋餘令出鉦
子餘等於大土器信
給後取人其人飲了
かしてんてりまさ
かろうハ正なぐよそ
まどけなきまこち

名経たど痛まるこゑもをうしきよふる白雪ととも
ふきえなむあども哀あり。そらなく暮もぬまが、ついで
たちよは元日能朝拜ふりまじめ、さまあくよめでたし。
殿上此かこにい、後取志んどりといひく、いとまさなうこ
ぢたきけはひども聞えより。ついたちよりはじめ
どもいみじう繁けまば、さまぐいはひもどもよてく
れぬべし。正月よぞみやの御まへ出させ給ふべき。そ
の月女房能なりあどあざやうよせさせ給ふ。さてそ
の夜よなりぬまば、儀式ありさまなを思ひやるべし。
つね能行啓せさせ給ふ。めでたしと有りつれど、かう
やハ見えさせ給ひつる。御輿のかたひらよりまじめ
てぶろづいみしうさやうよめでたし。京極殿ハ方ふ

よきハ言痛きうて
駿がきやうなる
さまごいふけはひ
を様なり
方ふさうれハ方
塞れがよてこの時
代も隆功家の説
盛不行くれて方角
を思ひまこ
も京極殿の方を
むべき方なるとい
ふ
ふざん 不斷

たがまバ、えおはしまさで、東三條院よ出させ給ひぬ
まバ、三條内も御心ざし、いとあやうくなるまで、おほつ
りなくぞ思ひ聞えさせ給ふ。宮よハ殿おはしまして、
よき日して大般若觀音經、藥師經、壽命經あとの御讀
經、おのくふだんよはじめさせ給ふ。法花經ハはじめ
よりせさせ給へばなりけり。としごろ山よこもりて
里へもいでぬ僧ども、たつねめしいで、この御讀經
ふさぶらはせ給ふ。おほやけよりハ長日の御修法は
じめさせ給ふ。さまあくの御いのりどもいこじか、る
程よ殿の道長高松殿の頼信二郎君右馬のかまよておはしつ
る。十七ハはくりよやとぞいうよおほしけるより、夜な
かばかりよ、ヨハ横河のひじりのもとよおはして、これ法

師ふなうし給へ。年頃のほいありとの給ひけきバ、ひじり道長大殿のいとたふとき物にせさせ給ふよ、うならんら
うんだう侍なんと申てきかさりけきバ、いと心きた
なきひどりの心なりけり。道長殿びんなしとの給はせん
ももかばかりの身よてハ苦しうやおぼえん。わろく
もありけるかな。こゝよなきざともかばかり思ひ立
てとまるべきならずとの給はせけれバ、ことより也
とうちなきて成し奉りふけり。ひじりの衣とり着させ
給ひて、直衣指ぬき、さるべき御ぞなど、みなひじり
ふぬぎ給はせて、綿の御ぞ一つばかり奉りて、山坂無
動寺といふ所よ、夜のうちふおはしよけり。横川のひ
どりあやしき法師ひとりをぞ添へ奉りにける。そき

を御ともよてのぼり給ひぬ。この大徳などやいひち
らしけん。目の出る程よ、この願信殿うせ給へり。とて道長大殿
より多くの人をわらちて、もと奉らせ給ふよ、横川
のひとりりの許よて、出家し給へるといふ事を聞しめ
して、哀にかあしういさじとおぼしめて、横河のひ
じりを召よつかをよとるよ、思まりてとみよも参ら
ば、いと有まよき事ありまゐもくしと度く召れて参り
たれば、殿のおまへ泣く有さま問はせ給へバ、ひじり
申し、やうの給はせしさま、かうくいとふびんなる
事よつかうまつりて、かこまり申侍ると申せバ、か
どてか、ともかくも思はん。ひじりなきむともさば、か
り思ひたちては止るべき事ならん。いと若きころうち

とみよも 急いも
こ思ひ居るとまよ

申ししやう
きふ理の願信と問
答ししやう
淡きなり

山へまきのほらせ
由小右記寛弘
九年四月六日癸卯
資平云昨日左相府
騎馬從臣給殿登山
為被坊入道頭夜中
後所被退下云相
府令近江守知章無
動寺中忽令遣馬頭
住房令元其供料云
云五月廿三日庚寅
信聞今曉左府登山
依馬頭受戒事云
大外記教頼朝長云
馬頭無度縁宣旨衣
魁以前可持到延慶

よ、こゝらのなをすて、人志れず思ひたちけるあ
はもなりけるなりや。我心もまさりて、有けるか
なとて、山へ急ぎのぼらせ給ふ。高明女頭信母
高松どののうへハ、す
べて物もおぼえ給はむ。殿おませませバ、いくその
人くかきほひ上り給ふ。いつしのおはしましつきて
見奉らせ給へバ、例の僧たちいひたひのほどけちめ
みえてこそあまごれいさもなくて、あはれみ美しくし
うたふとげよておはす。なほ見奉り給ふや、御涙を
どめさせ給はば。そこの殿はらいみドウあはれよ
見奉らせ給ふ。殿のおまへさてもいかよ思ひたちし
るぞ。何事のうかりぞ。わををつらしと思ふ事やあ
りし。官かうぶりの心もとなくおぼえしが、又いりて

寺之由頭并被仰云
云とあるを参考を
べし

この殿父子の間答
ふその情をうつし
かせることなるり
ことくいとかなし
うなん

りと思ひかけさり、をんなのちやありし。こと事ハ
知らず。世にあらん限りハ、何事をら見すて、ハあら
むと思ふよ心うくく母をもわをも思ふで、か
る子とのたまひ續けてなりせ給へバ、いと心あまた
ごまげよ思して、わをもうちなき給ひて、さらハ何事
をり思ひ給へんだをさなく侍りをりより、いりて
と思ひ侍りよ、さやうもおぼしめしうけぬるを
かくと申さんもいとほづりし侍りしをどよ、かう
まであなさせ給ひよ、のバ、いもあらでありき
侍りなり。たれももくなくかくてこそ、つかうま
つる心ざしも侍らめと申し給ふ。さてやうてそこよ
おはしましべき、御心おきて有べき子どもは給はす。

みやくの御つかひなどすべていと物さじがし。殿道長の
おまへなうらうおりさせ給ひぬ。御装束いそぎして奉
らせさまぐの物とも奉らせ給ふ。高松殿のうへなく
なく、御その事いそぎ給ふ。殿道長はらみやくの奉らせ
給つる御ぞをぞ、御料よハせさせ給ひける。いでや今
ハ布をこそとまでぞ思へりける。殿道長より妍子も宮妍子より
も、みなる御ぐおきて奉らせ給ふ。あられふいみどら有
がたき御すけ出家よなむ。

⑤ つばみ花

一條院うせさせ給ひて後、女御更衣の御ありさまと
もさまあぐみきこゆるふ、中宮妍子もさだにおをしまさね
バ、出させ給ひて、齋信大納言郁芳四郎の家よ抱は

つばみ花 この巻
ら積子内親王降誕
のすまららうけり
つらむとつらむ
やうてこの子の
行事より名つけた
るなり
大炊御門云々 紀

略小長和二年正月
十日中宮、中宮行啓
東三條第、依懐妊三
月也十六日以申去
夜丑剋東三條院燒
亡中宮、遷向南院次
御右衛門佐藤系輔
公宅、今夕行啓春宮
大夫、尚信卿、郁芳門
第四月十三日甲戌
中宮自春宮太夫家
还市上東門院とあ
るといふ合ハせべし

しまいて、月ごろよならせ給ひぬをバ、そこよてみこ
しを給ふべきよやなど思ふほどよ、此ころ土御門
ふわたらせ給ひぬべけきバ、家あるどどの齊信のなよわざ
をとおぼしいそぎ給ふ。それも東三條院よ出させ
給へりしを、そのわけ三條かバ、うちもわらせ給
へるなりけり。さて土御門殿よわたらせ給ふ、宮妍子の
御おくり物よ、何じざをよてまゐらせんとおぼしけ
るよ、なよもめつら志げなき世の御有さまとなり
よたぬまバ、申くなりとして、村上の御ときの日記を、大
きなるさうしよらう繪にか、せ給ひて、河ハ佐理の
兵部卿のむすめ中納言懷平室の君と、延幹の君とよか、せ給ひて、
うるはしき篋一よろひふ入とさせ給ひて、さべき御を

ちろいものたきもの
自然焼物なり

めいぼく 面白
り

本なると具して奉り給ひけし宮子バ、宮子を、ちろづの物よま
さりて、嬉しく思へめされけり。女房のちろよハ、おほ
いなる檜破子をして、ちろい物たき物などをぞ入て
出へ給へりける。かくて渡らせ給ひて、そこよて御祈
りどもを、彰子大宮の御をりのことづも皆せさせ給ふ。い
とよりなきほどの有さまにて、いとおそろしく、いろ
みくとおぼしきことづせ給ふ。まことや、りの齊信大納言の
御もとよ、さるべき家つかさなり、齊信殿位などまさらせ
給ひけり。いとめいぼくある御さまなり。かくていろ
みくと御心をつくしねんじ聞えさせ給ふ程よ、長和
二年七月六日の夕か、さより御けしきあるさまよお
なしませバ、御祈りの僧ども、聲をあはせての、ちり

うちまきーさく
云く 未だまきち
らほことよん産あ
のまがものを拂ふ
ためなりなりあひ
ハ、有り合ひよて後
種をよしめうちま
きなごの程の味り
合ひたるや、つみこ
そのちろ ちろつハ
相して人相の、ちろ
ならせたまし、ちろ
をいれこれ産あ
んくる、ちろおほし
たれたたのつちら
おも、ちろせぬひ
ちろ平産あり、ちろ
ち安らふあらせ
あひ、ちろちろ

加持まあり、うちまきしきさ三條内よも聞し召て、御使
ひまきまみ参る。御をらへのほどいみじくなりあひ
たり。月ごろはいとかりつる御祈りのちろしよや、
戌の時ばかりよ、いとたひら禊子のよみこ生を給ひぬ。今
ひとまきりのとよみの程あさましきまで、おどろく
しきに、ちろちろいどくるし、のらぬ程よあらせ給ひ
ぬ。せよなくめでたきちろなるよ、たぐみこなるよとい
ふる、聞え給をぬハ、をんなよおはしまし、よやと思え
たり。道長殿のおまへいとくちをしく思しめせど、さばれ
これをちろじめたる御事ならバ、こそあらめ。又もおの
づちらと思しめすよ、こまもわろからず思へ召れて、
こよひのうちみ御湯どの有べくの、ちりたつ。三條うち

申はりーはつし
と申す御の事く重
女の御侍遊ふ御を
たまふふりしこと
もこの時々はじめ
のやうふりけれと寛
弘におありけり
よし源氏物語も既
みかへえこととは
よりおありもこの
儀ありーふや
いふめあも云々
めち御目之御と申
も鮮のおゆると
右立派なることと
なり

いけざやうと奏せさせ給はねど、おのづから聞し
召しつ。御をうしいつしかともてまゐり、例は女に招
きまゐる御はりーハなきを何事も今の世の有
さまハ、さきぐの例をひりせ給ふべきふあらねバ、殊
の外よめでよけきバ、これをはじためとらためーと
なりぬべし。御使ひの録よめよもけざやかよ見ゆる
體の毛ごろものほども心ことなり。御乳つけよハ東
宮の御めのとの近江の内侍をめーたり。それハ御め
のとたちあまよ侍らふ申よも、これハ殿のうへへの御
めのと、此あまたのなるそのひとりとなり。大宮は
ないーなりけり。さて日頃候ふべきよ、宮の御湯殿の
ぎしき有さま思ひやりきこゆべし。五位六位御つるう

つるうち 管弦の
式を行はせぬへる
なり

はほみ花とを云
云 これ春の名の
おまらと云ふ

あない 案内よて
御乳母ふまらんと
人この申しはむを
つこ

ちお廿人召したり。五位ハ藏人五位をえらせ給へり。
女お招はーませバ、^{三條}うちよも今すこー心ことよ招き
て聞えさせ給ふ。たゞ同じくはと澄も招ほさるべし。
されど春宮の生と給へりしを、^{道長}殿のおまへの御はつ
うまこよて、榮花の初花ときこえたるふ、この御子を
バ、つほみ花とぞ聞えさすべりめる。それハたゞ今こ
そ心もとなけきと、時いたりて聞けさせ給はん程め
でたし。あらい御てうとなど、^{皇子}大宮の御れいなり。御め
のとよ人いこじくまゐらまほしう、あない申べし。^{皇子}宮
孔うちの女房たちよるべき君たちの御子うみたる
など、あがものよたのみ申たりけきと、いうよもく、唯
ふそ人のあたらしからむをなどぞ、^{皇子}宮の招前思し心

ざしためる。女房の白ききぬどもさむりあつさほ
どなれど、茶を志つくしいかでめづらきさまよせ
んと思ひたるさまども、心くにかしうふむ。御うぶ
やしなひ、三日夜ハ殿道長せさせ給ひ、五日夜ハ宮つかさ
七日ハ招ほやけより、九日ハ大みやよりぞせさせ給
ふべかめる。此頃殿もら殿上人のまゐる有さま、三位
よりはじめて六位まで、大宮彰子の御ときの有さま
なるべし。春宮敦成また御乳きこしめす程なれば、内侍近江と
うまゐるべき御消息志きりなり。御めのとよまゐら
んなど申人、あまたあるを、心もとなく思しめす程
又故關道隆白殿の御子といはる、中務大輔周頼ちゆうらいのきこ
のめのおとらと、俊遠がめなり。御めのことハ伊勢のら

うちとけたる云々
道長の差宮と云

ありけり 髪髪の振
分けおほしは生
くこのまゝ髪
とせしむるとん
く

みのむすめぞまゐりさるハ、やがて夜のうち御乳
きこしめさせて、内侍ハ内へ参りぬ。さべきおくり物
など、いとおどらおとらうおほしおきてさせ給ひ
て、御乳つけしもあらず、やがて御めのどのうちよ
入させ給ひつ。積子積子宮の御ぐしあさましく長くふり
こけよ生ひさせ給へり。やがてかくておほしきこえ
させんと定めあり。何事もいとめでたし。いみじう美
くしげおほし、ますを内三條まもきこしめして、いつし
かどゆかしく思ひ聞えさせ給へり。此ごろハ少し心
のどかけよて殿道長の御前なる夜中わらはず、積子積子宮の御
あつらひに渡らせ給ふ、誰も己びしくあつき程に
うちとけたるいねどもいとかはらいたし。今参り

一つきたまふて
打解けて寝ねたま
へるつあつき程か
れいらつはらい
くおほふとこ

いそぎみのきま
行事あらんとお
ほのめく殿内
殿のきもの
くろひなとせらる

たる御めのとも、いとゞ物はづかしげなり。三條内よいと
ゆうーげに思ひきこえさせ給へれば、九月ばうりふ
行幸あらせむと、殿道長の御前おほし心ざしたり。妍子宮の御
まへ、其後なやましげのまおはしませば、とみまも
参らせ給ふまじ。行幸のまをこのころハ殿道長のうちい
そぎみづき萬つくろはせ給ふ。御五十日いかをみかど三條はう
ちよてなどおほしのたまふすも、宮妍子のえ参らせ給
はねバ、さとよてきこしめす。殿道長より萬ふ志つくさせ
給ひく内殿上大盤所など、萬ふおほみ彰子やまでもてま
ありささぐ。さまぐのをりびつ物こものなど、教を盡
してさせ給へり。又内三條よりいっでか思へおきてさせ
給ひけんと思ゆるまで、よろづこまろよめでたくせ

宮のきふだ
つうする人の名を
のきつけさるもの
なり

させ給へり。八月廿五日のほどなれば、女房のなりど
もいみじう志たるふ、又た、む月の行幸のまをいそ
ぎた、せ給ふ。御うぶやのをりも御五十日いっも、内の女
房のさるべき限り皆まぬりたり。みろどの御めのと
の、紀の三位のむすめ、源内侍のすけをはじめ、さうり
少将などや、さるべき人々ハ、みな宮妍子のみふたよつき
たるとも、おぼつらなるら、す参りまかづめり。九月も
も成ぬまバ、行幸のまけふあすの程よいそがせ給ふ
まいみど。宮の女房のありいみどきふ、うんの殿威子の御
うら殿倫子のうへの御か、わきもくとの、こゝる事いと
し。船の樂がなどいみどくとのへさせ給へり。行幸の
有さまみな例のさほうなれば、書つづくま。大宮彰子の

東宮敬成の生もさせ給へりし後の行幸たゞ其まゝの有
さまなり。殿のありさまいみづくおもし。中島の
松のつたのもちちなど、つねの年いとかうもあ
らねど、世のけしきよあさかふま、いみづくさうり
ふ色くめでたく見ゆるまゝ、まゝしうそゝろさむし。三條
への御らんずるふ御めも及ばずめでたう思しめさ
る、まゝ船の樂どももの舞ひ出たるなど、大かここ、能
みとも思しめされずいゝじく御覽せらる。松の風さ
んをあらぶるまゝ聞え、よろづおもしらく吹あそせた
り。みすきはの女房のなりいへばえならぬまほひど
もなり。入らせ給ひていつか禰子とわら宮をいづらハ
と申させ給へば、殿道長の御まへ抱き奉らせ給ひて候は

このこと 世
のふといおぼさぬ
こ
えまゝしう 笑ま
うこ
えちらぬ 一通お
らぬまゝはき
こ

せ給へば、いだきとり奉らせ給ひて、見奉らせ給へ
ば、ふくよかま美しくしうおはし、まゝて御ぐりふりわ
けまおはしますを御覧し驚かせ給ひて、いゝまなど
聞えさせ給へば、御物がさりをこゑ高まさせ給ひ
て、うちえみくせさせ給へば、あなうつくし。ちり給へ
るまこそあめれまだかゝる人こそ見ざりつゝ、
たて餘りゆうしき御うかたなごとしすきをたてたけ
まもなりぬべりめまなど作せらるて、いみづく美く
しげま聞えさせ給ふ。宮新子の御まへも見奉らせ給へば、
唐の綾を白ぎくよておし重ねて奉りたる。さまば白
き御ふそひと見えてめでたきま、いゝまもあつきほ
どの御事ハ、御ぐりのためこそいみじけきとて、見奉

こことまきは云々
未年ふもならは
昔のまお髪の延ん
と作せらるあり

まそふたまりたる
髪の本の衣の裾
ふ漏りこるをいふ
こ

らせ路へバ、御すそふたまりたる程、こよなく所せげ
不見えさせ路へバ、帝、詞あやしく見ぐるしき子もちの御
ぐしりな。ある子もちなどハ、髪のスそほそう色あを
びれなどしたればこそ、心くるしけむ、いとものぐる
ほしき御ありさまうな。此禊子ちご宮もは、妍子の御有さま
ふ、似たるふこそあめをなど聞え路ひて、いつらめの
とハと同はせ路へバ、道長殿の御前御めのとハいたくさ
とび、物はちしてえ参り侍らざめりとて、又抱きあて
奉らせ路ひぬ。御帳のうちよ入らせ路ひて、月頃の御
物語など心、のどろよ聞え路ふ。かく美しくしき人を今
まで見ざりつるる、猶めでたきふなれど、この身のあ
りさまこそまろハ見苦くけれ、いみづく思ふ人のど

ささび云々 郵び
よそ田舎風なるも
のなれを恥てはあ
ふ出ぬ

中島の物の音
あやしく馬鹿の名
跡のものゝ音なり

もかくもおをせんを、とみも見ぬる、いみづくち
をしかりなど、萬ふ聞えさせ給ひて、いざ見むかへて
なりよふせて見ん、いみづく美しくしきものかな、この
當子禊子等宮達のちごなりしをこそ、美しくしう見しかど、猶それ
ハ例の有さま也、これハことの外よをうしく見ゆる
て、いめのといるまよ、まろめのとよて侍らんなど、聞
えさせ路へバ、ものぐるほしとてすこし志のびやう
ふわらはせ路ふ。かゝる程よ、目もくれぬま、上達部
の御遊びよなりぬるが、いみづくあつうしくおもし
ろきよ、中島のものゝ音など、物をもるうよ聞ゆるよ、浪
のこゑ松の風なども、さまあぐにいみじやとみよ出さ

かうぶりゆるべき
云々 冠位を編ハ
ることを聴くもふ
べきなり
舞踏 序あまて行
ふ最敬礼なり

せ給ふまじき御けしきなきは、道長殿入らせ給へばいと
おもしろしとき、侍り樂のこゑハきくこそおもしろ
けき見るハをりしうやハあるさまぐの舞どもハ
皆見をべりぬといとのどかよの給をす色ハすげな
くて出させ給ひぬむげよ夜よ入ぬれば、そのか
申させ給へば、志ふくよおきさせ給ふとて、猶とく入
らせ給へ、けふあすの程よと返く聞えさせ給ひて出
させ給ひぬ。かくて頼通左大将めして、この家のこのきん
たちの位増し、道長殿の家司どもの加階せさせ、又此預子こ
宮の御めのとの、かうぶりゆるべきなりなどかき出さ
せ給ひて、宮預子の御まへよ啓せさせ給ふ。道長殿ハやがて御
前よて舞踏志給ふ。預子わらみやの御めのとかうぶりた

世のあえもの云々
世のあやうりこ
きもの小聞ゆるこ
とこのる殿をこ
そ勝地といふもの
うるすこそ茶花
といはれぬなど世
ふもてはやまこと

まはり、近江の内侍ハ加階をぞせさせ給へる。かくて
御おくり物、かんたちめ殿上人などのおくり物、例の
ことども思ひやるべし。よろづあさましくめでたき
物の有さまなり。この土御門殿にいくそたび行幸あ
りて、あまたの后いでいらさせ給ひぬらんと、世のあえ
物に聞えつべき殿なり。これを勝地といふなり。これ
を茶花といふふよこそあめれと、あやしの物どもの、
下を限れる志あども、歡び忍み榮えたり。げよこそ
よき予を見きくハ、我身の事ならねど、うれしうめて
たり、あしき予を見聞ハ、せむかしくなくいとほしきわ
さなれば、此殿ばら宮への御有さまを、何れのたみも
めでよろこび聞えたり。三條みりど歸らせ給ひて後ハ、わ

あはのつこ云々
阿波守順時、粟田
在衛の孫、伊執事
司馬方左衛門佐

今めく 當世風
とよそふこと

預子
宮を御心よつき戀ひしう思ひ聞えさせ給ひて、た
どとくくとのみ御使志きりふ冬れども、猶例ならず
のみ思されて、のどかげなる御けりきなり。されど内
より聞よくきまで申させ給へば十一月十日の程より
ぞ参らせ給ふべき。五節臨時祭などうち頻れば、女房
のなりあどあまゝ重ねの御よりいあるべし。月ころ
ひさし〜成よける御さとる若き人となほ心ごとふ
今めくめり。若みやの御めのと、いま二人参りそひたり。
一人ハあはのかみまささとき朝臣のむすめ、辨のめ
のと、いふ。いま一人ハ伊勢前司、たうかこの朝臣の
むすめ、中務のめのと、いふ。月ごろさまゝ冬り集り
たる、女房の教など多かるべし。こたみハ法住寺のお

宮者の孫

おほろけのまき云々
おほろけなら
ぬといふこととお
ほろけとのこいへ
る之官仕へふおぬ
もの一通りなら
ぬ疵あり又と片羽
つけるやうふ世の

為光
の五のきみ、やがて五の御かごとてさぶらひ給

ふ。故関白殿の御むすめ、たいに御かたのはらのきみ、

此みかどの東宮おはしまし、時の御くしげどの

よて候ひし、麗景殿の内侍のかみ、御はらからた

るべし。又正光の大藏卿のむすめ、源帥の御なりの君

はらも参り給へり。それも御くしげ殿にさせ給へ

り。此ほりのさべき人のむすめあど、教いと多う参り

給へり。すべてこの頃のよりいさべき人のめこ、皆宮

仕へに出はてぬ。こもりたるハ、おほろけのきさずら

とをつききたらんとぞいふめる。さてもあさましき世

なりや。太政大臣の御むすめもかく出まじらひ給ふ。

いみじき事なり。今志をしあらば、何の院などの御の

人よりと

ちも出給ひぬべりめりなどぞ人申める。かくて参らせ給ひぬまば、禎子若宮を上の御前御めのとの煩ひなく、明暮抱きもてあつりはせ給ふ。餘りうごころ痛し。今よりはうなき御ぐども何よりを志のこさんと申し召たり。

はらなく年もかへりて、長和三年ふ成ぬ。正月一日よりはじめて、あたらまぐめづらき御有さまあり。新しまの年立かへりぬれば、雲の上もはもぐしう見え、てそらをあふがも夜のほどまたちかはりたる春霞霞も紫よりすく濃くたふびき、日のけしきうらら、この光りさやけく見え、百千鳥も囀りまさり、よろづ皆こゝろあるさまふ見え、枝なかりつる花もいつし

萩のやけ原云々
大和物語云々
きは萩のやけ原
き日けてこらなつ
まんとはまきは
んといひ今集
春の霞のとふひの
那さいでと見よ
いくのありて
なつてんとある
秋のまうそら
子の日の松も云々
拾遺草云々
とせよへ限とる
もくふよりお
ひらきてよつ
や理んといふ
まふれり

らとびもをとき垣ねの草も青みこたり、あしたの原も萩のやけ原かきはらひ、うすが野のとふひの野もりも、萬代の春のはじめのわら菜をつみ、氷とく風もゆるく吹て、枝をならさず、谷の營も行末はるかなる聲も聞えて耳とまり、舟園の子の目も松も、いつしと君よひかきて、茶代を經んと思ひて、常盤かきはの緑の色ふのく見え、またひのほとりのちくえりも、まゑのよはるかよ見え、階のもとささうびもなつを待かほよなどして、まよめめてたきよ、朝拜よりはじめて、よろづふをうしきよ、妍子宮の御方の女房のなりども、常だよあるよ、まいて物あざやう、薫うふうきもことわりと見え、殿上ふ志んとりといひて、こ

ちたたく酔ひの、ありて、うたてくらうがはしきるど
もさーまじるべし。さるべき公けの御政をもおほし
まぎとずうへ中宮の御方又渡らせ給へり。えもいは
ずめでたき御直衣よなべてならずかゞやくはうま
なるおほんぞともを重ねさせ給へり。御かさち有さ
まをかしうらうらうはつらしげ又おはしまは。宮の
御まへハ萌黄の御几帳よはたかくきておはします。
紅梅の御ぞをぞやへよもすぎて、いくつともなく奉
りたるうへようきもんの色こまやうなるを奉りた
るよ、同じ色の御扇のかたそをのかたふ、大きな山
かきたるを、わざとならず、さしかくさせ給へる御有
様なべてならずはづかえげ又げさううおとしませ

前書の前几帳云々
几帳小半うくれ
ておはしまは宮の
さまじらけるなり
例のこまやうなる
華つきんぎのこ
とくいとめてさし

おりのふま織
物や上よりきる衣
なり髪のかるとい
ふと毛の枯れて少
き時のさうんさ
さうんさうんさ
はーまといふ

御ぐしのおさまさう、長く所せげよおはします程、い
りでかくと見奉らせ給ふ。織物よかみ、たるといふ
ま、かみのかるびもすくなき時のま也けり。やがて
うるはしくすかりてびまもたぐめでたくおとしま
は。うへいづらハ^{三條}宮はとのたまハすまバ、令婦の
めのこといごき奉りて参る。御はう一辯のめのごもて
参る。御ぐしをそがせ給へれば、おしへし今こそちご
なりけきとて、それよつけてもあま美しくーと見奉ら
せ給ひて、抱き取奉らせ給ひて、もちひか、み見せ奉
らせ給ふとて、聞よくききて祈り祝ひつけさせ給
ふ子どもを御前よ候ふ人々ハえ念せず、おのづから
うちさ、めき、おづ急ほがひなどいふ心ちこそすれ

卯杖 抱きもちて
他る態と拂ふ杖

なり正月十日日不
諸系如杖と詠るこ
と延喜式は次第等
ふたえより未本抄
小序方違まゝ曝不
とふつへらせあふ
とて如杖はうみま
まきこゝめしやま
まききいのる如杖
のまゝ一ちらたま
とせの坂もゆつこ
らめやはといへる
春山院の法製奉り
おこりこゝり集
りこゝりこゝり集
る義なり

として、忍びやうと笑ふを、いりみくと仰せらるゝほど
も、すゞろよめでたくおぼえさせ給ふ。御めのとたち
られもくと花を折てつううまつるほどもあらまほ
しげなり。宮妍子と御物語せさせ給ひて、うち笑はせ給ふ
なども聞ゆ。若き人とおしこりさる御几帳此きはな
ど、繪よか、まほし。大納言頼通殿参らせ給へれば、志ばし
御物語などありて、やがて御ともよつかうまつらせ
給ひぬ。四宮師明の御ぐしながうて、御直衣すがたをんな
をつくま立たらんやうよ見えさせ給ふ。子どもやう
やうもそく、心のどかまなりもていきて、うへより松
よ雪のこほりたるを、
まこれど過よりかた此こほりこそまつと久し

大出てきてやけぬ
云々百録抄ふ二月
九日内裏まじ天皇
御朝所次は下曹
司、正幸杖把第とわ
り

南殿 紫宸殿のま
をいふこ

とどこほりけきとあまき宮妍子の御かへし、
千代ふべき松のこほりいまこれどうちとけがこ
き物にぞ有ける。つごもりみ成ぬまば、つらさめしと
て嬉しきもさらぬもあり。かくて内日たりめでとく
て過させ給ふ程又、火出きてやけぬ。みかども宮妍子も松
本といふ所に渡らせ給ひぬ。いづきの御時もかゝる
まはあれど心のどかまもおぼしめされぬよ、かゝ
るまをいとく口をしくおぼさるべし。三日ありてや
がて内裏作るべきまおぼしおきてさせ給ふ。其をり
の修理のかみよハ皇居宮城子の御せうとの通任のきみ
南殿作るべく仰せらる。木工頭よハこの宮稚子に御めの
との男、中務大輔ちうよりとありし君を、この司めし

受領 諸國司の事
ありまぬ 散るる
よて地方ふ下るを
いふ

あざみ 玉小松補
ふあざみとわやザマ
シガリノツ、マリ
タルニテ俗ニ興ヲ
サマシキモヲツツ
スヲ云フ如ク、メテ
オドロク、フヲ云フ
ナリとあり

よなさせ給へりしかば、清涼殿をバそれつくること
殿をバたゞ受領おのく皆つかうまつるべき宣旨下
至て、官の使部はら、國々よあかれぬ。此四月よあれの
目より、手斧はぶめて、来年の四月いぜんふ作り出
さざらんをバ、つうさをとり國を召かへしなどせさ
せ給ふべきよし、の宣旨くだりぬ。かくきびしく仰せ
られしりバ、まつ近き國々南殿清涼殿なるとも、みな
四月棟あげんとす。おほやけるハことなるものなり
けり。くと見あざみ思ふべし。

⑤ 玉村菊

こと一春宮教成せよならせ給ふ。長和三年といふに、御文
はじめの事あり。孝士よハ大江匡衡が子の一條院の

玉のむらさきくこ
の美わ後一條院の
淡如始のくしより
西五位大嘗會等の
事又後子内物等着
袴等のことこのハ
り美の名ち中の河
ふよれり
檢非違使の當 按
能違使を使職とも
いひて嵯峨天皇ハ
本の右衛門別當
ハ即その長女あり
これハあふもほせ
り

御時の藏人つかふまつりした舉周うちかをぞなさせ給
へる。その頃大道長殿ハ左大臣よておはします。堀河のを
バ右大臣顯光と聞ゆ。閑院のをバ内大臣公季ときこゆ。殿の君
達太郎ハ大納言賴通よておはします。二郎ハ左衛門督教通よ
て、檢非違使の別當と聞ゆ。高松殿のを二位中將賴宗など
きこゆ。よの上達部さまくおはすれど志るさげ。月日
すぎて年もかへりぬ。正長和四二月れいの世の有さまよて
過もて行く。今年ハ姫宮禎子の御とし三よならせたまへ
バ、四月よ御はうまぎの事あるべし。今より作物所
などよ、ちひさき御具どもいみじうせさせ給ふ。帝批三條
把殿よおはしませバ、やがてそのものよてあるべし。
うちなどよてあらぬをくちをしく思しめさるほど

うちつくりいつと
ハ云く る録抄不
云く九月廿日自批
把筆辻幸新造内裏
云く

御めのとよりはじめ宮の女房いみじういそきたり。
かくてうちつくりいづまバ、十月に渡らせ給ふ。その
程の有さま例のごとし。中宮^{皇子}ちごみや入せ給へ。いら
せ給へとあれど、とみよ入せ給えぬ程、皇后宮^{皇子}いら
せ給ひぬ。女二宮ごひしうおをしませバ、ゆるしく思
ひ聞えさせ給ふなるべし。さていらせ給ひて、目ごろ
おをしまし渡る程、内の御物忌なりける日、皇后宮^{皇子}
の御湯殿つかうまつりけるよ、いづまけん、火いで
きて内やけぬ。かゝる予ハさてもよるたごころあま
畫なまバ、いといじうがたをら痛く心あまたし
き予おほかり。東宮^{敦成}もいらせ給へりしうバ、それハや
がて一條院よこらせ給ひぬ。ゆるひるきびしうお

うくることのある
予をぞ この下詞
おちたるり

あへなき はるか
くもるきよきよ

ほせられて、いそぎつくりみだきたりけるよ、いらせ
給ひて、一月だよなきてかゝる予はある物の。これよ
つけても帝世^{三條}中心うくおぼさるゝ予かぎりなき。皇
后宮もありきていらせ給ひて、かゝる事のあるを、い
みどろおぼしなげかせ給ふべし。うへハおりさせ給
はんとして、かくよるをひるふしいそがせ給ひしかど
も、すべて心うくかゝる予のあるをぞうちのやくる
予たびくふなりぬ。一條院の御時たご度くありしう
ど、此よびのやうにあへおきたびなし。
長和五年正月十九日、御讓位、春宮よハ式部^{敦明}卿宮た、
せ給ひぬ。二月七日、御即位なり。みかどハ九よたさせ
給ひ、東宮ハ廿三よぞおはしける。こよなきほどの御

ひつら 三つら
もいふ髪の法ひや
うの童帝のさまふ
り

河のひ柳云く 顯
宗紀小室壽の冠の
口黎ふいなむち
河のひ柳水ゆけい

およすげなり。おりののみろどをば三條院ときこえ
さす。おりさせ給ひても内のやけよしかはばおは批祀
殿おおしきつきバ其まうとおはしまは。御即位
小大極殿と帝出させ給へる。御びづらゆはせ給へ
る程いみじうつくしくめでたうおはします。春宮
の御ありさまのやむるならめでしくおはします。又
つけても皇后宮ハあも色時大将殿おはしまさましら
バいのみめてたき御うーる見ならましとのみ御心
お思いつづけさせ給ひてゆくければ志漢のびさせ
給ふ。大殿道長ハ世はらはらせ給へど御身ハいとゞさり
えさせ給ふ様よて河そのひ柳風ふけバうごくとはま
どねハ志づかなりといふふる歌のやうよ、動きさく

なびきおきくちそ
のねいうせはとあ
るよまれり

そこふらぐ云々
形千載集との秋
とのせて五月五日
批祀皇太后宮子書
浦の振とまらせぬ
ふとして上東門院と
有せり

ておたしますすもえもいはずめでたき御有様なりし
よなほ又この度ハ今ひとしほの色も心ごとよみえ
させ給ふぞいとゞいみじうおはしまはぬ。院春宮
の御事をさへ申つけさせ給へバ、姫宮子の御事を思ひ
きこえさせ給へバ、御いとまもおはしまさねど、萬あ
つかひ聞えさせ給ふ。はらなる五月五日も成りけ
るハ、大宮子よりひめ宮子とてくすだま奉らせ給へり。
それよ、

そこ深くひけと絶せぬあやめ草ちとせをまつの
ねよやくらべん御かへし、中宮子より、
年毎のあやめのねも引りへてごはたぐひなの
あがきためしやごとくハ大宮子もあるべき年なる也

ぬりごめ あふも
出さるごとく金籠
こそ納戸やうのと
ころご室物ともと
入れおのせらとし

バ、今よりわかきんだちはうなきつばやなぐひのか
ざりや、乗馬け、のずまごの事をおぼしいそぎけ
るもをうしくて、六月もたちぬ。七月ついたちよハ、法
興院の御八講なごいそがせ給ふ。のゝるほども、七月
廿二日火いできて、土御門殿やけぬ。おほ方そのあさ
りの人の家のこまなくて四五町ぐ程やけぬを、さ
しすぎ法興院もやけぬ。倫子へのおまへは、のゝる御思
ひもて、一條殿おはしまし、彰子大宮も殿道長のおまへも内
ふおはしましける夜も焼ぬを、つゆとり出させ
給ふ物あく、年頃の御つたはり物ども教も志らず、ぬ
りごめよとやけぬ。猶さべきたぬと思しなげらせ
給ふよ、この殿の山中島たどの大木とも、まつのつた

が悉くやけしか
りこの太事のこと
も百鍊お紀略等ふ
あり

のゝりていゝかりつるたど、おほったひと木のこ
らず成ぬ。あさましうことさらよすとも、いとかくこ
そハやけめといみじうありがとけなり。いみじきや
といふとも、つくりいて、む。志るかぬ。このねの御寶
物は、おのつららいできまうけさせ給ひてん。この木
ごものありさま、おほきさどもをぞ、世よくちを、き
ことよ思しなげかせ給ふ。彰子大宮の御領の宮なれば、そ
の御ごともさべき物ども、たゞ此殿よこそハおらせ
給へりけき。すべてめづらかありともおろろなり。道長殿
は小一條どのよわたらせ給ふ。この殿は、やぶて八月
より手斧はじめさせ給ひて、来年の四月いせんよ
つくりいづべきよしおほせ給ひて、國々の守屋一つ

づゝあたりて、よるをひるにいそぎのゝゝる。かくて
御袂ふなりぬき、いさゞうつねも似てこれハな
よものもあらためさせ給へり。このばら君たちの
御馬鞍弓、胡籙のかざりまでいといみじ。女御代ハ、
高松との、小一條女御姫君いでさせ給へり。その車の袖くちの
ずちらずおほくかさなりうづやけり。後一條帝童ふおはし
ませバ、彰子大宮御輿奉りたれば、其ほどまねひやらん
かこなくめでたし。大将どの、御有さまなど聞えさ
せんよもこだいなり。たびくとしくの御けしきふこ
ふたうだちまさらせ給へり。思ひなしまやとまをな
む。たゞ今の左大将ハ、との、賴通太郎君こそハおはま
も。右大将ハ、小野宮の實資の殿おたは。左大将の御

三十五こゝさいときびまよをかしきよ、小野宮のハねび給
へれど、それいみじくなべてならぬ。かほつきよ、うち
ほゝまみ給へる口つきこそ、猶ふりがさうことも
りて見えたまへど、物見車、さどきたまど、むらし
のりおほゆま、めできこえ、教通左衛門督、賴宗右衛門督
ふて、みな殿の君達おはしまま、衛府すがたども、花や
かよをりよあひたる御有さまども、時の花のこゝ
ちして、いとめでたし。宮の女房の車内方のなど、女御
代の御ともものなど、えもいとぬくるま、四五十ばかり
ひきつゞきておしこりたり。左大臣よてハ、道長大殿おは
しまは。右大臣よてハ、顯光ほりかはのおとゞ、内大臣よて
ハ、公季閑院おとゞおはします。いづれの殿ばらも、みち

馬もてつかうまつらせ給へれど道長大殿はよろづもて
ておさらせ給ひぬるきはよ又さらふ御前などえり
すぐりて、きずなくきらゝかなる限りをえらせ給ひ
て、三四十人ごうりつかうまつりたるは御隨身十二
人ごどねりの御隨身なども馬ふのりて、みさきえも
いはば、まゐりのゝ、ちりて、我はがらに御車よたてま
つりおとしまはほほど、すべてまねび聞えさすべきや
うなまし。まゝさむかりめでよきまやありける。いみじ
き見物もすぎぬ。霜月ふなりぬを、大嘗會として、又人
くひゝきのゝゝる。五節もことしをいまめかしさま
さりをかゝゆきすぎがこの歌ども、れいの事なれど
かたはしをだにとてあるせり。ゆき備中國のねつき

ゆきまき 帝王備
年記十一月十五日
乙卯大嘗會巡紀近
江國甲賀郡土井備

中國下道郡陸奥
行成御寄之とあり

うた内藏權頭よし志げのためまき、
年へたる玉回のいねをかけつみて千代のためし
ふつきぞはどむる。すきのかゝ、大内記菅原のりたゝ
の朝臣、

いたかきのをしふみならゝ運ぶなりそとも、道の
のみゆきためたよ、ゆきすきのうたども、同じさまふ
かやう也。御屏風の歌ためまさはやのといふ所を
秋かぜよなびくはや野のむすきほよ出てみゆ
る君よりつ代御屏風を資忠玉の村菊といふ所を
うちはつて庭おもゝろき初霜ふ同じころなる玉
のむらぎくふひたの池ためまき、
そこ清きよひたの池の水のおもはくもりなき世

丑のむらぎ 寒の
名のおこりなり

の鏡とぞ見るがやうふ同じ心なればとめつ。豊の
あかりの夜あれたる宿は月のもりたりけきばさと
人たれとあらば。

年中行事の障子
作座下のもとふ立
ておのせみ障子
よて年中の禁中の
儀式のあらまじし
とともごのせみ
へもごのくいふか
り
例のなほのもの
江次第抄ふ云く直
物若除目之時所給
於二省之召名中有

めづらき豊の明りのひかりにハおれたる宿の
うちさへぞてゐる。このたびの御即位ごけい大嘗會ふ
どの程のりどもすべて教しらずめづらきくやむこ
となくて年中行事の御障子もかきそへらましたる
事どもいと多くなんあなる。年もかへりぬ。ごごを
バ寛仁元年丁酉歳ごごいふ。正二月ハれいの有さま
よて過もてゆくよ。三月よハ例のなほのものなごい
ふりあれバにや。三月四日つりさめあり。大殿左大
臣を辭せさせたまへバ、ほり河の右大臣左となり給

失錯之時大臣着障
令參議改直件召名
也上古毎年除目法
一月中行之中古以
來五年又必行之其
時召出年々召名而
悉改之其失錯者外
記作も勅勅文奉と
也此法或破行小除
目叙位女左除目叙
位等有不定也と
ありこれなり源氏
かとも思ゆ

ひぬ。右ハ閑院内大臣なり給ひぬ。内大臣ハこの
の大將ならせたまひぬ。かやうなこともかはりぬ
と見る程、同一月の十七日、大殿攝政を内大臣と
のみ譲り聞えさせ給ふ。内のおほい殿御年ごと一せ
六よぞおはしませける。いとわううおはしませよと
おそろくおほしなぐら、我おはしませバ、なごごと
もおのづからと思しめすなるべし。われハたごいま
ハ御つりさもなき定にておはしますやうなれど、御
位ハ殿もうへも准三宮よて、おはしませバ、世ふめで
たき御ありさまどもなり。殿の御まへの御さいはひ
ハさらももきこえさせぬみうへのおまへのかく后
とひとしき御位よて、よろづのつかさかりぶりえさ

うせさせ給ぬといふ
ふ 一代要記云大
皇太后藤通子寛
仁元年六月一日崩
年六十二とあり田
野院の御后頼忠公
の女なり

本綿四手 この巻
ふ八寛仁元年及び
二年中の事ばかり
ゆふてと名つけ
るなり
ふ歌の例みられ
るなり
ふなやみ云く 三
茶院の御病重らせ
たまひをいふ

せ給ひなどして、年ごろの女房もみなかうぶりをえ
あるハ四位になさせ給ふもあり。さまぐいとめでた
くおはしまし。かくて四條の皇太后宮遵子をやませ給ひ
て、まつりなどはて、のちようせさせ給ひぬとりふ。
あうる、かたなく、四條大納言公任あつかひ聞えさせ給
ふ。いとあはせなる世中なり。

⑬ 木綿四手

御なやみねもらせ給て、院源僧都めして御ぐしたる
させ給ほど、中宮妍子をはじめたてまつりて、宮くいとじ
う、世みなげかききりに思しめ、て涙に去づませ給
へり。皇太后宮城子いよそにきりせ給ねぼつらなさをそへ
て、いみじう、ねぼしまどはせ給とめ、道長ねまへも、いみ

たへたる 堪へる
るなり

さばらうともさ
とひらうふい病
氣ありてありとも
りい余さへあらば
と透長の相ほり歎
くなり

宮く 敦儀、敦実師
母なるの宮くなり

じうなげうせ給。一院とて、ねをしまさん、にたへたる
御心おきてをぐちをしう、心不そくねをせどかひ
な。ねあじ院と申ながら、御心うるはしく、物のせえ
ねはしましつる物を、禎子ひめ宮などの、ねとなびさせ給
へらん程の、御心おきてなどもゆるかりつる物を
あど、返々ねぼしつづけさせ給。さをかうても、たひら
かにだふ、ねをしまさばなぞぞ見たてまつらせ給。御
物のけどもいと心あはたぐきけはひなれば、御余
のかさ、いさりともとねぼさる。うちつけふや、すこし
かるませ給やうなれば、うちたゆみて、たも心のど
うふ、ねさる、もそとよりにみゆるを、宮くいらに
と、あなれに、ふるひるまどはれつかりまつらせ給ぞ

東宮 昭子小一系
院々

あさましうあらせ
給ぬ 紀略云五月
九日丙午太上天皇
崩于三茶殿十二日
已酉奉前系院
詔可停止素服奉表
之由自今日廢朝
日又諸衛將國三
使官符各給國司
夜奉葬三茶院於石
陰

いとめでたき。東宮は、いとゆかしき御ありさまを、お
とにきうせ給につけても、いみじう御むねふさがり
て、かなしうおぼしめさる。かくて日ごろ心のとうな
るふうちたゆませ給へりつるに、寛仁元年五月九日
のひるつうた、^{三茶院}あさましうならせ給ぬ。院の中、とよみ
てのゝ志るともおろろなりや。宮こゝ急をとしませ
給はぬに、^{妍子}中宮ハ御ぞとひきかつぎて、物もおぼえさ
せ給はず。橘三位いひつゞけて、なくなきえいりて
あし給へるも、いみじうめづらうなるかなしきなり。
とゞころの女房たち、殿上人いへばおろかにまどひ
たり。ひめ^{積子}みやの御まへ、いつゝにぞならせ給。御ぐし
ハ居たけはうりにぞおぼしめさせたま。世をいと心あはた

だしげふおぼしめし、物のかくをにふりて御たま
ぞをおののごひて、おぼしめさせたま。見たてまつる人
御めのことなど、やらんかたなくかなしたるの人など
ハ、なふともおぼしめせ給。いりて思へばおぼしめせ給にか
とおろかならぬおぼしめせ給。かたへハ、あ
またおぼしめせ給。殿のたまへいと
ら、おぼしめせ給。御いとにもこもりつうま
つらせたまはぬことを思へば、攝政にて世をま
りごたせたまへば、いかでかハよろづの大事どもの
さしあひたさば、いと不いなくおぼしめせ給。よそな
がらよろづを志らせ給。おぼしめせ給。十一日、御
葬送せさせ給。一條の院のたまはしまし、いとかけに

崇徳天皇御記

ぞれをしまま。五月雨もいみじきころにて、むづかし
けきどげよそれよさはるべきまならねば、せさせ給
へるぞいこじうあわれにかなしき東宮のよるづも
のねほえさせ給はず、城子皇太后宮も、こゝらのとしごゐの
御なからひなれば、きこえさするもおろかなり。な不
心うまハやむことなけきどよそくにたはします御
みどもになんかぎりなき御身なれど、ねなじけふり
とならせたまふも、いみじうかなし。ある人思やり聞
えさせて、ひとりごちけれど、そのひとゝ志るまは。
日のもとをてら志ゝ君がいなかげの教はのけふ
りとなるぞかなしき。かくてこととはてゝかへらせ給
ぬ。このゝちは、御念佛などふ、僧のさるべきかぎりさ

道命阿闍梨
本宮の侍道綱の男
天正寺の別當なり
この歌は拾遺小あ
りて三條院のくれ
させ給けるころ時
をなきやうふと初
めあり

ぶらひ給とりはらひて、佛かけ奉り、さるべき僧など
のたれさぶらふも、いとかなし。さるべきとこ
ろぐの、いたどもはなちて、みやくつちどのにたはし
まはほど浅ましう怒しともおろかなり。御ぞの色な
ど、みなこくたてまつりわさしたるに、あさましき物
などを、みやくのたてまつりて、なぬらゝの御ときを
せさせたまふも、いみじうあはれにかなし。さるべき
殿上人など皆哀なるまゝ、み教などよみたれど、かき
もとめぬ。道命阿闍梨のばかりぞ、人かきとめた
りける。
あゝびまきのやまほとゝぎは、このころハ、我なくね
をやきゝわたるらん。とぞありける。此院も御そらぶ

崇徳天皇御記

そらぐんは遺財の
ひまふなり

殿の扱まへせさせ
給云々 院のほき
物を道長の沙汰ま
るなり

んもなくて、うせさせ給にけり。冷泉院の御領の所、
にほく侍しも、此院よりすりすぐりて志らせ給けり。又
兼家
大入道殿の御孫の宮達の御中に、此院をいみじう、ま
たなき物にたもひきこえさせ給へりけむ。むかし
もな忘れらせ給し程のことも、すべてところくをば
たゞこの院またてまつらせ給へれば、さきくの院よ
りも、この院よりいみじうやむことなき所、たほく
ぞさぶらひける。さきバこの比、道長殿の扱まへせさせ
給ける。たはしましをりも、禊子ひめみやを、いかでと思
ひきこえさせ給て、かくいとをさなく、たはしますを、
一品になしたてまつらせ給ひしも、いと哀し思ひい
で聞えさせ給て、この中宮のひめ宮、春宮、皇后宮、敦平今云

三条院の母公
家の女起子なり

教儀 師明 當子 礼子
所の官齋宮姫宮などよくかぞへたて、さきまぐわう
ちたてまつらせ給。御よりいのありがたく、たはしま
すと、人聞えさす。かのたはしましをりの、御思のほ
どをたほし、志りつゝ、ぞわち奉らせ給ける。そが中
にも、大入道殿よりわたりたりし所、くをぞ、ほかさま
ふいせさせ給はざりける。それもさるべきこと、人
申けり。この三条院を、一品の宮の御領に、ぞそのを
りよりの給はせけむ。せさせ給へれど、そこに、た
はしますまじ。寢殿ハ寺になさせ給ひければ、御いみ
の程すぎなバ、こぼたせ給べしとぞ思しめしける。中
宮ハ御忌のまつるまで、ハあどたほしめしなから、此
院のもの、けなどもいとたそろしければ、あいなし。

光厳天皇御遺言

うるをりよや云
出家などせん
と思せしもあうけ
まじりやう

いづこまでもおろりなるべきやうハとし、志をしあ
りて、一條どのふわたしたてまつらせ給てけり。御法
事やがて、此院にて六月廿五日又せさせ給。その程の
事ども、いといかめし。四^{師明}宮まだわらははにて、たそしま
して、かゝるをりよやあどおぼしめす事もありけし
ど、おぼかたいたのどかにたとなしき御心にて、この
をりならんども、おのづから心あわたしきやうな
りなど、おぼしのだむるを、おはしまさましうバ、か
だにおぼしかけましやと、人忘れずおぼさるべし。
中^{母子}宮ハ一條殿にて、おけくれ御おこなひにてすぐさ
せ給ふ。月日のすぐるにつけても、ひ^{陽明禰子}め宮のあててあ
りかせ給ふ、あやうすものなども、たてまつらで、たゞ

このまのき 粧別
書きし 宮の物と
いふたのふしませ
り
あての内もと貴
き許ふ奉らんと
今^{郭公}郭公
ふき人の宿ふら
ふて、時をうけて
おののみきこつ
げん

のきぬを御あこめよて、うす色などにて、ありかせ給。
御ぐしながくて、ちひさきわらはへなどのやうにて
おはしまはれも、おはれにいみじき物と思ひ聞えさせ
給へり。物をと、御めのとたちかけ奉らぬをりなう、
こひなきたてまつる。ひめ宮み、ずかきにせさせ給
へる、これいがてあての御もとに、たてまつらんと、の
給はするふつけても、郭公よやつけましなど、おはれ
ふ御らんぜらる。あていまるをバ、こひしとハおぼさ
ぬ。などかいと久しくわたらせ給はぬなどかきつ
づけさせ給も、なまだとし、めがたう、御まへにもおぼ
しめし、さぶらふ人とも、おもへり。みやたちなども、お
ぼつうならず、あたり見たてまつらせけり。東^{敷明}宮よ

光厳天皇御遺言

りもまかなき御あそび物などまづたてまつらせ給
との、御まへ、一條^{中宮}殿の御つれづれにたはしますらん
とて、我もつねふ御とるせさせ給。その殿をらもつ
ねに参らせ給べく申させ給。院のたはしますさぬかた
こそ、いみじけれど、たほらたの御ありさまハ、殿の
たはしますせば、たなじりにのきなん。そのとりの殿上
人、心よせの殿ばらなどいつねにまゐり給ふ。
かゝる程又、東宮^{教明}にの御心にか、たはしますらん。か
くてかぎりなき御身を、なにもたぼされずむかし
の御志のびありきのみこひしくたぼされて、ごきく
につけて、花紅葉も、御心よまゝせて御らんぜむとの
きなやいゝでさ様にてもありにしがなとたぼしめ

このところ太流ふ
尤くは一参考べし

一生ハ云、
の皇后をふとひた
まふん

あるべき
皇太子の位ハ
申しては位とつ
せたまへく定め
おらせられしを
いふ

さる、御心よるひるきうにおほさる、もわりなく
て、皇后^{城子}宮に、一生いいくむくに侍らぬ、なやかなくて
侍こそいといぶせく侍れ。さるべきにや侍らん。いに
一へのありさまに、こゝろやすくこそ侍らまほし
けれなど、をりくに聞えさせ給へれば、^{城子}みやはいと心
うき御心なり。御物のけのたもはせたてまつるなら
ん。故^{三條}院のあるべきさまに志す急奉らせ給し御身を
いりにたぼしめして、やがて御あともつがび、世の
ためしにもならむとハたぼしめすぞ、いと心うきこ
となりおどつねに、いさめ申させ給て、御物のけの
かうハたもはせたてまつるなりとて、所々に御いの
りをせさせ給。おぼしあまりてハわかやうなる殿上

あくらげ 殿上人などのお勧め申すべく心違ひぬらんと言官のおほまゝあくるると心のさきぐくうきつこと

人の申あくがらすならんとしてめしれほせなどせさせ給。されど、^{道長}とのかまへよさるべき人してかうやうになどまねび申させ給。殿のかまへいとあるまどき御事なり。さは故院の御つきいなくてやませ給べきか。いみどかりよの御物のけなれば、それがさかもはせてまつるならんと、のたまはせて、きいれさせ給えぬを、いので對面せんとたびくきこえさせ給へば、殿まゐらせたまへり。たほつかなきよの御物語など聞えさせ給て、なほ此宿世のわろきにや侍らん。かくうるはしきありさまこそいとむづりけれいかで、杞り侍りて一院といはきて侍らんときこえさせ給へば、さらふいとあさましきよし、たほせらる

らば、みちさ思給ながら、えさらぬ事のれほく侍れば、^{後一茶}内にも當代いとをさあくれば、しませば、よろづいとまなうさぶらひてなん。なかにつきてこの一品宮^{陽明}の御ためをねもひ給ふれば、御心のどかよ、世をも思したもたせ給て、ねはしきさんのみこそ、たのもしくうれしく候べけれ。たごこれいこくならし。御物のけのれぼさるゝなめりと、申させ給へば、なでふものけにかあらん。たごもとよりあそびの心のみありならひにければ、かくてあるがいとむづかし、たほえて、心にまかせてあらんと思ふと申させ給へば、いと不便なる事なり。出家とまでねがめさまを、いとことのほろし侍り。さらばさるべきさまにつかうま

つるべきにこそ侍なれ。一院にてたはしまさむも、御身ハいとめでたき事に、たはします。よにめでたきものハ、太上天皇にこそたはしまはめきなど、よく御心のどかに聞えさせ給て、まかてさせ給ぬ。

そのまゝにやがて大宮東門院ふまゐらせ給て、かうくのすをなん、春宮たびくの給はすれど、さらにうけひき申さぬに、めしておほせられつるやうなど、こまやか又申させ給に、頼通攝政どのもたはします。人のこれをとかくたもひ聞えさするまならバこそあらめ。おがたはやすくからはせ給へる御心なれば、一院とて御心にまかせてあらむと思しめしたるもいとあらまほしきまなり。さて春宮にハ、後朱雀三宮こそハるさせ給はめ

帥の中納言 隆家
ハ致原親王の伯父

と申させ給へバ、大宮げにそれハさるまふ侍れど、式部致康卿宮などのさてればしまさんこそ、よく侍らめ。そをこそ、みかどにもすゑたてまつらまほしかり。かと、故院のせさせ給へるなれば、さてやみにき。此たびはかの宮のゐさせ給はんハ、故院の御心のうちにておほしけんほいもあり。官の御ためにもよくなむあるべき。わかみやは御すくせにまかせてあらばやとなん思侍るときこそえさせ給へバ、殿げにいとありがたくあはれに、おほせらるゝこと又侍まど、故院もことりならずたゞ御うしろみなきにより、かしこうたはまれど、かやうの御ありさまは、たゞ御うしろみからなり。帥の中納言隆家だに、京になきこそなどあるまどき

なり

小一條院ときこえ
さへ 百餘抄寛仁
元年八月九日皇太
子敦明親王依病辭
遁立敦良親王為皇
太弟左任記小年官
年爵及び封寺と定
め院の官矣とも任
せらまゝとてえお
ころとてあひさ
り

ことにはぼしきだめつ。
かくて八月九日東宮^{後朱雀}た、せ給ひぬ。たしめの東宮を
バ、小一條院ときこえさす。院いとれぼしめすさまよ
やさしくたぼしめされて、十二人の御隨身えりと、
のへさせ給。のるべき馬鞍のそろへをせさせ給。故院
の御隨身どもの、世中をいとあえなく思ひたりつる
に、さるべうび、しきなどい、みな参りあつまりぬ。殿
上人のさるべくつかひつけさせ給へる人々などい
こどうけうありと思へり。皇^{城子}后宮いとありぬことふ
くちをしうたぼせど、また一院とて年官年爵えさせ
給。藏人判官代にくれのさだめあるにつけても、あ
くくはれはしまさげ。いまめかしう御心やり、あらま

ほしげなるか、八月、月ころの御有さまにまさらせ給
へり。さは故院の御つきい、かくてやませ給ひぬるふ
やと、たぼしめすかたぞ、いとかなしかりける。
東宮^{後朱雀}の御めのとたちつひの御事ながら、たちまちの
とはねもはざりつるに、あさましくうれしきに、せむ
かこなし。東宮大夫よ、大殿の高松のはらの中^{頼宗}納言
なり給ぬ。權大夫に、法^{為光}住寺の大臣どの、兵衛督公
信のきみなり給。東宮傳に、^公兩院の右のれほい殿な
り給ぬ。官司帶刀などい、我もくと、きほひ給へど、大殿
えらびなさせ給つ。よろづあなめてたとみえさせ給
ふ。帶刀ともいとも、きよき人の子どもをなさせ給。
なほ^{上東}犬みやの御さいはひ、世にいみじくたはしま

このつふい云
白子小昇らんと
まろつふい云

式部卿の宮このかよハむげにねぼしめしたえ
にしかど此たびのひまにハ、なればたちいで給ぬ
べかりつるを御すぐせをば、あらせたまたまえずとも、な
ほあやしうといいうでか思しめさざらん。世ともふ
はれぐ志からぬ御けしきふも、心ぐるしうなむ。前の
春宮の帯刀ども、手にすゑたる鷹をそら志たるなど
いふ様に思べし。いまの東宮のを、のぞき申すとぐひ
どもあべかめきど、ことのほろの事にてきこしめし
いさび。それもことより、いましくねがされぬべ
きなり。前の春宮ハ、御年廿四にならせ給にけり。今
の東宮ハ、九にぞねはしましける。御門も春宮も、御行
末はるかよねはしまし御有さまよつけても、いとめ

でたし。かくて高松どの、姫君政子の御事あるべしとぞ
世にハいふめる。さてその頃殿倫子のうへ、八幡にまうで
させ給へりければ、中宮よりきこえさせ給。

いろくのもみちにこゝろうつるともみやこのほ
ろふなぐるすな君御かへしありけんりし。これハね
ちたるなるべし。

かくて十月ばかりに雅通の中將日頃わづらひて
うせ給ぬとのゝ志る。殿倫子のうへ、哀よきこしめ給。故穆子
へのいみじきものふねぼしたりし物をと思しめす
なりけり。いまハ小少將兼經をこそハとりわき思ふべか
めれとぞのたまはせける。世中のはうなきさまも哀
にのみなん。一條妍子の宮にハ、心のどかに思しめさるゝ

小少將 兼經 倫
子の姪なり

まゝに御扱こなひがちにてすぐさせ給。後夜のかね
の扱ともれどろくしうきこしめされけをば、みかう
しをおゝあけて御覧じて。

みな人のあかすのま見るもみち葉をさそひにさ
そふ木がらゝのかせとぞの給はせける。あくて世の
中う、五節やなうやとのゝゝるたもどぞこの御わ
たりには、ありしむかしを思しいでつゝ、よろづをれ
ぼしやるに、さるべき殿上人などまゐりたるついで
に、わりきんくいであひて、物がたりするも、をゝき
ふ、又殿の君達などぞいますこしものこまやうなる
事ども、いかたらせ給める。賀茂の行幸まだなかりけ
れば、廿五日むかりにあるべきまゝとのゝゝれば、この

左経記云廿五日巳
未天晴已尅有賀茂行
幸左右兩府有障不
被參撰政殿乘馬令
候與後給又大殿於
御車同令候御後給
云々子三刺還堂今
日午後時微雨

一條殿の北のみかどのまへよりぞ、わたらせ給べか
なれば、宮新子の御前にさぶらふ人も、ゆくしがり思
へど、物はなやかならんも、人めつゝ、まじうれば、め
されて、たゞみきものもとより、いくらむりか、御
らんぜられんなどあるも、いとこゝろもとなかるべ
きを、目ごろ人くいとまゝに、申し思へるほどに、
殿まるらせ給て、いかにぞ行幸の御覧せんすや。こ
の北のみかどよりこそ、おたらせ給べかめれなど
申させ給へば、いざや、さやりにこの人く、いふめれ
ど、いかでか、いと給はは、あやしのことや、さじ
きをつくり、なやかさせ給は、こそ、人のそしりも
あらめれまへより、わたらせ給はんことを、御かほふ

たがせ給べき事かいななど申させ給て、たゞさりげあ
くきたのついちをくづさせ給て、御らんずべきよ
を申招かせ給ひて、いでさせ給ぬれば、わかき人こよ
ろこびきこえさす。さて御らんずるに、いみじうめて
たし。大宮も御輿にたてまつりて、女房車えならずし
て、わたらせ給程など、えもいとばめでたく、御覽せら
る。よろつはて、後に、大殿わたらせ給こそ、あないみ
じやとみえさせ給へ。又の目、このみ選子やより大宮上東門院小き
こえさせ給。

みゆきせし
この歌後拾遺
也とちのり云々
このうへ續後撰
見ゆ

みゆきせし賀茂の河なこかへるさにたちやとま
るとまちあかしくる。大宮御かへし、
たちりへりかも、の河なこよそにても見しやみゆ

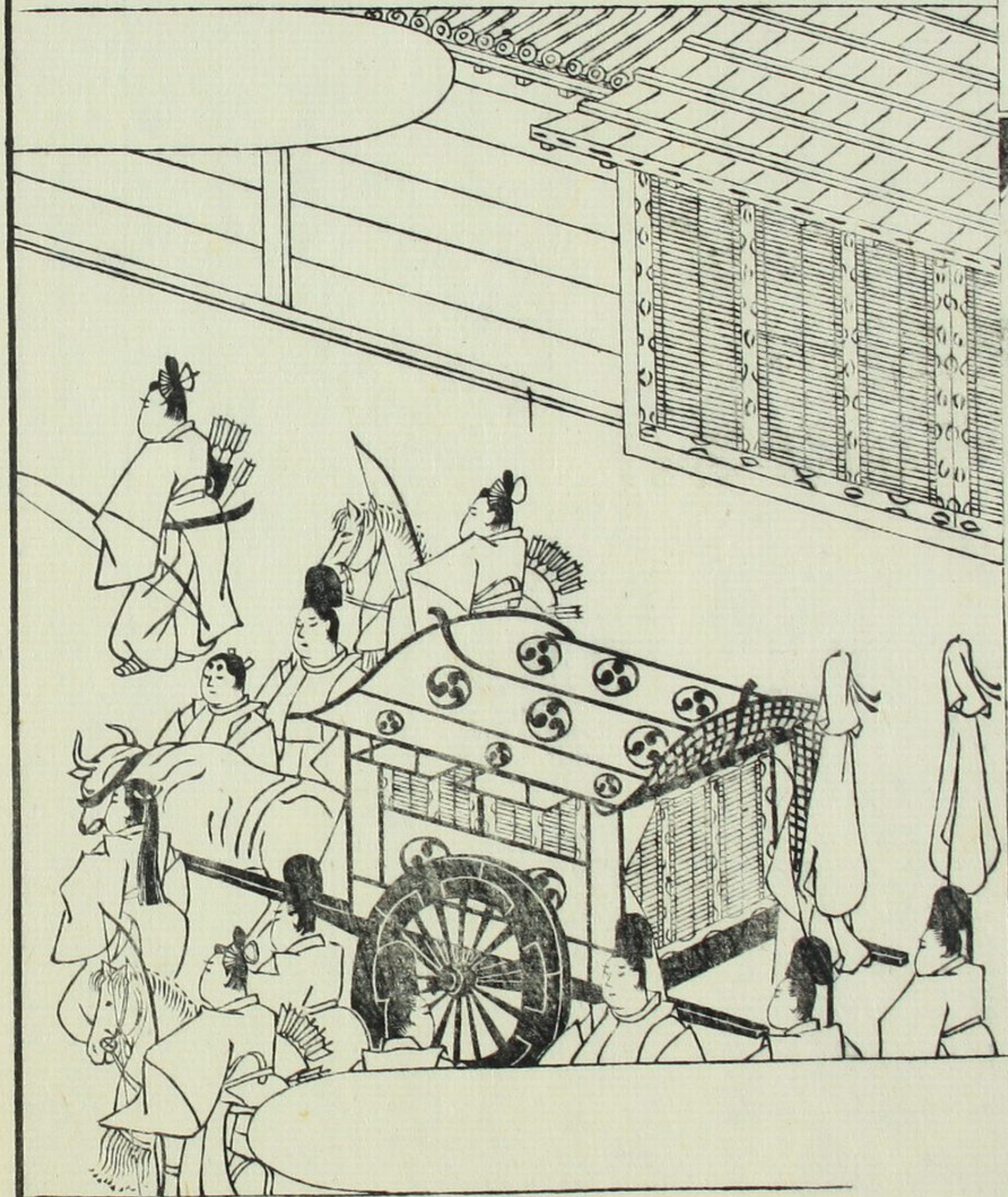
院のウツ云々 小
一茶院及名の文章
ふなり給ふのり云々
り

きの志るしたるらん。さて院小茶の御事けふあるべしと
の、志るハ、まことよやあらん。呼顯光女延子りうその女御この
事をき、て、御むもふたがりて、思しなげくべし。さて
志はすにぞむことりたてまつらせ給べき。此ころそ
の御よりい、心ことなり。此政子にまへをバ、月頃御くしげ
殿とぞきこえさせける。御かたちありさま、あべい
ぎりにはしまま。御心さまなど、人いめでよしとぞ申
める。さるべき人、えりしものへさせ給。みやくなど
に、参りこみてやとれぼしめしつれどばぢなき人
れほくまわりつどひたり。まづハ、故院よさぶらひ給
し。攝三位のはらうら。山井道賴の大納言のむすめといは
れ給へる。大納言の君とてさぶらひ給めり。なにくれ

茶花物語抄



茶花物語抄



朝経 兼通の三男
閑院左大将朝光の
男藤中納言と号は
頼宗能信皆高松の
腹なり

の宮かのとのはらの御むすめ女御などさるべき人
人た不かめり。すべてえりと、のへたるかぎり世人
童下仕四人づつなり。御志つらひよりはじめあらし
う、みがきたてさせ給へれば、うゞやきてぞみゆる。そ
のよになりて、院小一条わたらせ給ふ。御ぜんにさるべう心
よせある殿上人とえらせ給へり。またなうりつる御
なうらひのありさまのほどよにあらまほしき事の
ためしになりぬべし。殿上人のけしきなどもいへば
わろかななり。さかりならんさくらあどの心ちあさり。
御車の志りふ、大藏卿つかうまつり給へり。さてれば
しましたれば、この御はらからの左衛門督二位中将能信
など志そくさしていれ奉り給。殿はればしますなま

ふめあもあるし
夜目も著きま
なり

ど、志のびてうちのかたにぞればしますべき。との
御せむどもハそバのかたに、忍びやかにうちむれて
あるふ、院の御ともの人と、志のびさせ給へど、いとた
ほくぞさぶらふ。御隨身どものけしき、えもいはずや
さしう思へり。いらせたまへれば、おほとなぶら、あるか
なきかにほのめきわたれど、にほひありさま、夜めに
も志るし。東宮にてればしましをり、まゐらせ給は
ましう、れいのさほうにこそハあらましか、こまハ
いまめかしう、けぢうをうしき物から、又いとやむこ
となし。女君十八九ばかりにやれば、しますらんとぞ
たぼえたる。御けはひ有さま、いとかひありてればさ
るべし。それにつけても堀河の女御延子思いでられ給も

心ぐるしかの女御も御かたちよく心ばせればすれ
バ年ぶろいみじうねもひきこえさせ給へりつきど
たゞいまなにもあたら志うめでたき御有さまい
今すこーいたはしうればしめさるゝも我ながらこ
とより志るさまおぼさる冬之夜なれどはうなく
あけぬればいでさせ給ふもいとあかぬさまに、たぼ
さる御どもの御隨身御車副舍人までたゞいまその
まゝにて位につかせ給へらましよりもめでたしと
けに思ひたりかへらせ給ぬれば女御の君御帳より
もいさせたまはず院よりのやがてたはしましけ
るまゝふやとみゆる程又御つかひあり二位能信中將あ
ごいであひたまひてえもいはははは給ふよ女房

けふ思ひうま
さうて思ひうり
と

ところあらはし
露見とつきて披露
のこし

のかはらけさしいづるそでくちなどこそめもあや
たれ御かへり給はりて女の装束にえびそめの小袷
そへてたまはりてまるりぬ。初日くるゝもこゝろも
となくてたはしましぬ。四五日ありてぞ御ところあ
らまゝありける小一条城子院皇后宮まゐり給て申させ給ふさうい
かふはづう侍らんずらんかこよまかまバ二位
中將能信三位長家中將などまちむるふるよいとすゞろはし
きにこよひハもちひの夜とかき侍つる。たゞも
物せらるべきやうにこそまゝ侍かど聞えさせ給
へバげにいかにとたぼしめて御装束どもにえな
らぬ香とも志めさせ給。さやうのかたふはなべてた
らぬ宮の御ありさまに心ことにはづかしうればし

めしてたてさせ給ほどたしはうるべし。かくて御と
もにまゐる人々、すこしもかこくなしきはえりすて
させ給。れはしきしていらせ給へば、左衛門督など、ま
いの君達参らせ給へれば、なまするはしう、たぼし
めされていらせ給。殿上人の座に、懸盤ついでの物どもい
みじう志すゑたり。御隨身所めしつぎ所、敷しらば、机
の物ども、志しゑたり。もてなし給さま心ゆくさまお
り。志ましくさすがにみゆ。いらせ給へば、おほとなぶら
ひるのやうにあかき、女房三四人五六人づゝ、うち
むれつゝ、えもいはぬ有さまどももて、かをりふさか
りたるあふぎどもをさしかくして、おみさぶらふ程、
いみじうたどろくしきものからはづかしげなり。御

つとみふさうりた
りたる扇 薫り寒
りたる扇

志つらひありさま、かゞやくとみゆ。院の御心ち、と
比羅河のわたりのありさま、御めうつりたまづ思し
いでらるべし。かくて物まゐらせ給。御まかなひ、左
衛門督頼宗つかうまつり給。とりつぎ給ふるハ二位中将
三位中将長家をさせ給。御だいまるりてのほど、お犬道長とのい
でさせ給てうるはしき御よそひにて、御かはらけ参ら
せ給ほどいへば、おろかにめでたし。院ハ御ぞども、御
直衣などの色を、いとつゝまゝ、かたはらいたる、れ
ぼせど、かやうのことは、それをゆくしくと、たぼしの
給えせぬるなれば、いうよぞや。やつきたるさまを、は
づかしうたぼしめせど、なゆく、それも夜め又は、御
色のあこひもては、やさされて、けざやかに、をかしう見

餅餅や云々 嫁娶
の三日小あくる夜
餅を物するは此頃
定まれる作法ある

えさせ給もことさらめきてありぬべき事なりけり
とぞみえさせ給。御けはひ匂ひなどぞ志みかへらせ
給へる。御かたちハけぢうくあいぎやうづきをうし
うたはしまじ。こよひの御有さまかならず給にか
まほし。御年廿三四をりにたはしませば、さかりに
めでたくひげなどもすこしけはひつうせ給へる。あ
なあらまほしめでたやとぞみゆる御ありさまなめ
り。かくて御ともの人々の禄どもれいのさほうに、い
ますこしませ給へり。御隨身所召次所御車副、舎人
ども、さまいくいとたどろくちう、たぼしおきてたり。大
殿ハ、とくうへらせ給ぬ。餅はや、御破子の蓋御帳のう
ちふさりげおくさしいきてたはしましぬるなど、も

由花を餘情なくと
しよふもちひの釈
とあるもこのまふ
り

のいみすまじう、あまをよにみえさせ給。かくて、かのほ
り河の女御、其まゝにむねふごがりて、露をうり御ゆ
をだふまゐらでふさせ給へり。頭光たごもきえ入りぬ
むありよてふしたまへるふつ教貞の宮おはしまし、お
とがたきふく馬にせんとたこしたてまつらせ給へ
バ、我にもあらずたきあがり給て、たうばひして、馬小
なりてのせたてまつり給て、むひありかせ給へバ、一
宮まいよりはうごりぬ馬かなとて御あふぎして、こ
ろくとうち奉らせ給を、女御みやりたてまつらせ給て、
いとめくる、心ちせさせ給へバ、いとどしき御心の
やこもまさらせ給て御ぞをひきかつぎて、ふさせ給
へり。いみどらあはれなる御ありさまどもなるに、女

御ハわかうれをすまばいとよしや、この御年はさ
ば^群うりたるふ、いうにつみえさせ給らんと見たてま
つる人もあたまを怒^{小一}くこ、ろうしと思ふべし。
日ごろありて、院ほりか^{頭光第}はの院ふれはしまし、御ら
んぞまば、わざと道もみえぬまでおれたり。哀と御覧
して、いらせ給へれば、女御殿は、御帳のまへに、御硯の
はこを枕にてふさせたまへるれまへに、女房二三人
ぞうり候つまど、たはしましつまび、みな入りけり。め
やひきんくさぶらひ、くども、このころ皆いではて
て、えさらぬ人くぞ、さぶらひける。見たてまつらせた
まへば、志るき御ぞども、いつ、むつばうりたてまつ
りて、御こりの程に、御ふすまを引かけてれをします。

御ぐしハ、いとるはしくて、すそほそくて、たけよ一
尺ばうりあまらせ給へる程なり。御うたち、きよげよ
て、たゞいまは廿をうりにたはしますらんかし。され
ど、いみじう、日うり、きよげに、見えさせ給。猶ふりた
き御かたち、うりかしと、御らんとて、や、とおどるか
し奉らせ給へば、なに心もなぐ、見あげ給へる。又、院の
おはしませをあさましくて、ゆのほをひきいせ給へを御
かたちらに、そひふさせ給て、うらづよなきま、わらひみぢ
さめ聞えさせ給へど、それよつけても胸ふさぐりて、涙の流
れいづまハ、院を茶ふきこえさせたまへど、うひなまし
いづら一の宮ハ、ときこえ給へをたをしまし、うち
はちらひてたはしませを、この宮も、みたはらだちに

ける物をとて、御なごだを、れしのごはせ給も、いみじ
うあはきなり。女御の御そでのかゝにたゞう紙のや
うなる物のあるを、とりて御覧すれば、たぼしけるる
ともぞ、かき給へる。

すきふける云々
これらの歌後古今
万代集等小あり

堀河女御
すきにけるとし月なれを、おもひけん、いましもゆ
の、なげかしきかな。まゝ

うちとけてたれもまたねぬ夢の世よ、人のつらさ
を、思ふぞ怨しき。

ちとせへん程を、おぼらずこぬ人を、まつはな、おこ
そ、久しかりけむ。

こひしきも、つらさも、共におぼらせつる、人を、ば、い
づらうと思はぬ。

とくごだに見えどもあるかな、冬、の夜の、かたし、く
そで、よむすぶこほりの、なとか、せ給へる、いみじう
あはれなり。かく物を、おもはせ、たてまつる、ま、な、ど、う
とき、ぐ、ハ、こ、にも、と、ま、ら、ざ、ら、ん、さ、れ、ど、人、の、い、み、じ
うも、て、な、し、た、ぼ、い、た、る、ま、の、わ、づ、ら、を、し、け、れ、ば、た、だ、
いま、い、り、で、か、ハ、い、ま、ま、は、し、も、あ、り、て、こ、そ、い、た、な、ど、
た、ぼ、す、も、い、と、あ、を、れ、な、り、む、す、ぶ、こ、ほ、り、の、と、か、き、給
へ、る、か、た、は、ら、に、あ、せ、給。

あふ、こ、ご、の、と、ご、こ、ほ、り、つ、ほ、ご、ふ、れ、ば、と、く、れ、ど
と、く、る、け、し、き、だ、な、し、よ、る、づ、に、た、だ、我、御、い、の、ち、志
ら、ぬ、ま、の、み、え、も、い、は、げ、き、こ、え、さ、せ、給、て、い、で、さ、せ
給、又、宮、達、の、た、ち、さ、こ、き、見、お、く、り、奉、ら、せ、給、に、又、御、涙

教員、教員、昌平、皆、延
子の腹あり

いつまでぐさ 枕
草子 小いつまでぐさ
ハおふる所いとそ
らあくあされたり
と見えぬ首首お
山家 公家 うち

のこぼるれば、ついでささせ給て、なぐさめたてまつら
せ給。御めのとごもめして、いだりせたてまつらせ給
て、との、御かたに、たそしませ給て、すこし心やま
くていできせ給。みちの空もなく、いみどうればさる
べし。御と、いの人とも、とまらせたまへ、いかにも
なうらんと、おひけるふいできせ給へ、いともしく思たる
も、いとこころうし。高松殿にたはしましたれば、たとへたまき
る子どもおほり。こたみのたえまいとこよふし。女^{延子}いよいたる
はなげきふハ、我身のなうらんのとぞたゆべきと、清心ひと
つと、となしかうなし。いつまでぐさとのとればしみだる。おは^{道兼}
た殿の北^{遠重、女}の方ハ、年ごろこの^{頭光}の北方にて、おはまれば、こけ
頃ハ、うへたもとのきこえ路も、殿はき、いれさせ給はむい

小おふるいつまで
まのいつまでうか
れずとふべき志の
原の里あども見え
たり
のさき 荷前とら
くかり 國々の潤
物のさつほと諸殿
ふたてまつるあふ
り
くちまうぞく
ちとらうオホサル
といふ洞と省きて
あける法なりこの

じとのみ物をたぼしたるが、いとあはれふなむ。つこ
もりになりぬれば、高松殿にハ、やがてそれにぞ、院の
御めのとたらに、さべき子どもせさせ給。装束ひとく
だり、たり物のきぬ又たぐのきぬなど、そへさせ給へ
るに、院の御ぢ^{姪子}もおろしそへさせ給に、またある
物もあるべし。一條宮にハ、御のさきのことするにつ
けても、夢とのとればしめさる。衆の程ふ、かはりぬる
そらのけしきも、いとほむしく、くろのどろよて、
うらくとゆるしげなり。よろづ物のほえなき年なれを、
まいまするり給、上達部、臨時客同し事也。されど、女房な
どのいで入りもなく、ひきいりたる御ありさまも、く
ちをしうぞ。高松とのにハ、女房の事もあらため心ち

仲巻中ふあまきえ

正月三日流布本
五日とあるも誤
るべし百鋪抄左
記等いつれも三
日なり

よげなれど、院の御ぞの色こそなまむ、物のをえなき
ことどもなり。よろづよりも帝の御とし十一ふなら
せ給へば。正月三日、御元服の事あり。そのほどのあり
さま、思ひやるべし。この廿一日のほど、攝政殿の大饗
あるべけむ。御屏風どもせさせ給へるよ、さるべき
人々に、みな歌くばり給ははるに、大殿われもよまむ
とたほせられて、よのいそぎに御いとまもたそしま
さねどもまれば、はしちうにうちながめて、うめかせ
給程さまぐにめでたく、人の御身さいそひ御心
ざまも、つねのことながら、かをかりいそがしき御
心にかゝること、をさへおぼしわすまさせたまはぬ
御心の程も、きこえさせむかたなく、たはしまま、すべ

きこりといふ
この歌後拾遺集よ
ハきこませといふ

て、歌八十ぞ、いできたりつとど、いりたるかぎり、をたふ
盡しからず。大和守、すけた元方ノ孫の朝臣、御杖を、
ときをぬねひつらなまるとたまつばき、君がさかゆ
くつゑにこそきる。大饗したる所に、殿の御まへ、
きこがりとやりつるつらひきにけらし、野べのき
きすいとりや志つらん。かすがのつらひたつ所、ふい
づみ
かまが野に年もへぬべし、神のますみかきの山に
きたりと思へば、やまさきに水あるいへに、まらうど
のきたる、系主補親、
このやどふわを、とめなん池みづの、ふかき心に
すみわさるべく、五月節、をけたら、

みつのこまき 美
豆の御牧なり伊豆
ふあり

くらぶべきこまもあやめのくさもみなみつのみ
まきにひけるなりけり。九月九日、このまへへ、
かくのみもきくをぞ人の志のひける。まがきよこ
めて千代をふほへば、四條大納言^{公任}、べちに二首たてま
つらせ給へり。櫻の花見る女車あるところ、

春のをな秋のもみぢもいろくよ、さくらのみこそ
ひくまきはみま。まゝ紅葉ある山さどに、をどこまき
ま。

山ざとのもみぢ見にとや思ふらん。ちりをて、こ
そとふべかりけれ。いとねやうれどか、ず。大饗の日、
寛仁二年正月廿三日なり。ありさまいふもおろかふ
めでたし。尊者に、閑院^{公季}右大臣殿ぞ、たはしましける。

上陽人云、白氏
文集新樂府句自注
云、天宝五載、已後揚
貴妃專寵、後宮人無
復進言、天宮有美
色者、輒置別所、上陽
人、是其一也。
のこりの燈火云、
歌、殘燈背壁影、
暗雨打牆声云、
古今集小町
昔のこりうつり
みやりさつづら
よこが芳世よめる
なごめしまれ

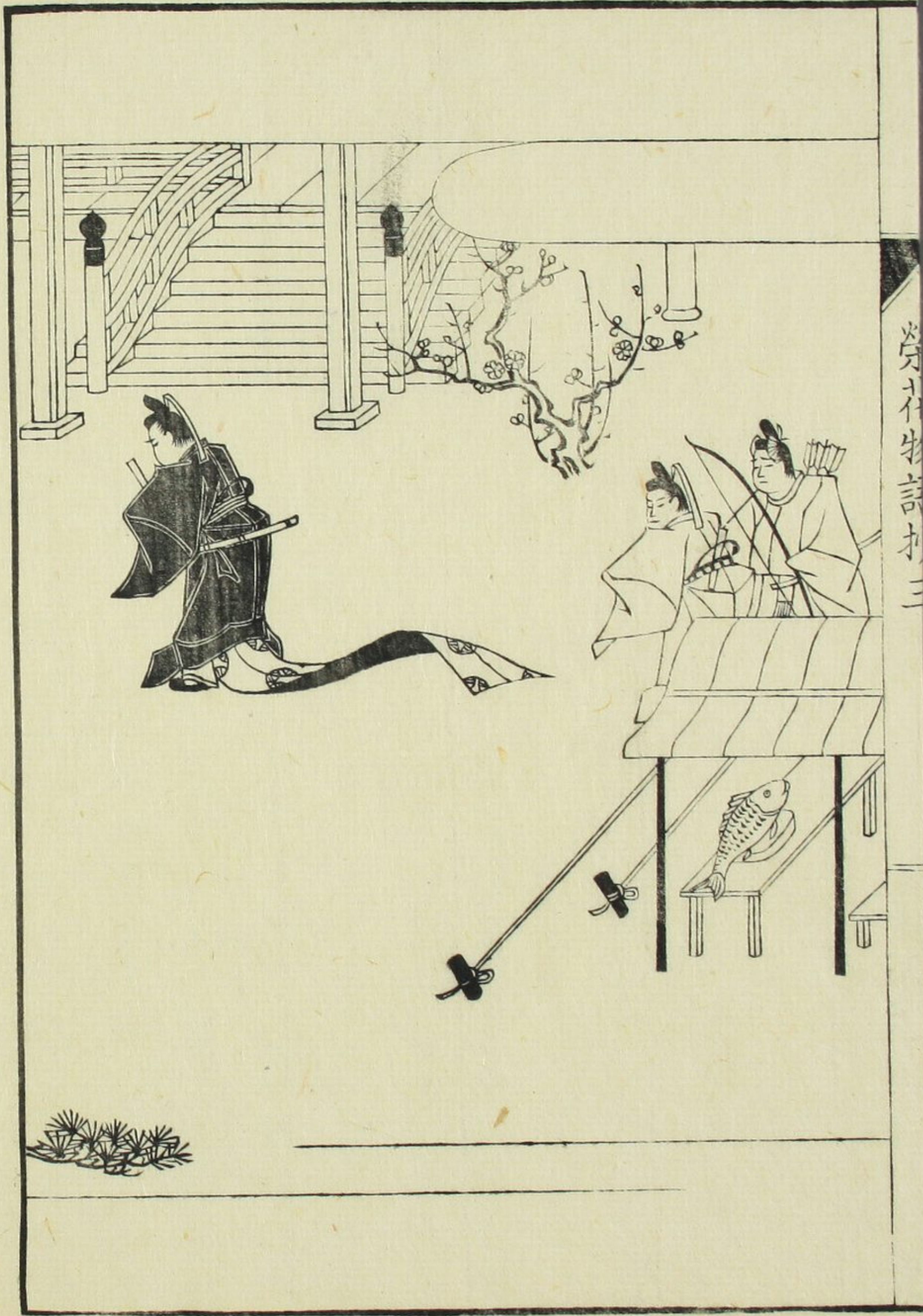
うへの御ありさまなど、いとあらまほしく、めでたき
このなり。式部^{武原}卿宮のひめ^{姫子}みや、うまき給しより、やが
てとりはなちて、やいなひたてまつらせたまへれば、
いとうつくしげよて、たはしまま。ほり^{頭光}うは院にハか
の上陽人の、春ゆき秋くれども、としを志らずといふ
やうに、明くるも、も志らせ給をば、あさましうたふし
なげきて、ねさめつ、よやあらむ、たほこのこもらね
ば、のこりのともし火のかべに、そむけるかげも、こ
ろほそくたほさるゝに、たまへの梅のこゝろよう、ひ
らけにけるも、これをいま、で志らざりけるよ、わが
身世にふるなど、ながめらま給て、
いつこより春きたりけん見し人もたえにーやど

水鏡物語卷之三



五十七

水鏡物語卷之三



きくをいふ上
小まげし新御上
陽人の詩の末より
暹羅屋天難宮
宮の博志御上
ある向ふより

あだ 和名抄ニ
履和名阿師太と申
り

ふ梅ぞにほへる。うぐひすのうらわかきはつねも
れはしけきば、きくをいとふなどありけんも、まこと
となりけりと、たほし志らる。よろづかはらぬ御あり
さまなるに、宮達の御ぞばかりをぞおざやけさせ給
ひて、院の御おきてのあまび、みやたちには、御節供まる
きり。よろづあはれなる世を、^{頭光}とのハ小袴きてあしだ
ハかせ給ひて、つゑをつきて、みちのまゝふありのせ
給。たまへの小本どもの、たひさきつくろはせたまへ
バ、一二の宮ハ、人にいだられさせ給て、まきありのせ
給程も、あはれよすでげなり。高松殿のありさまを、^{小茶}院
いかに御覧じくらぶらんと、御めうつりの程も、たも
ひやらせて、はづかしくすゞろはしく、たほさるゝ御

経房 醍醐天皇之
御孫高明紀之子

この巻は朝録とい
ふいあさみとりそ
らものしきまの
日ハくろくそき
ものしきまけ
ある秋子なり

心のうちも、ことごとくながらおながちなり。枇杷殿の
宮^{姪子}にハ、故院^{三條}の御笛を、この宮の権大夫とあるハ、源中
納言に、これがたがひたるところつくろひて、お
づけさせ給へりけるを、物の中より見いで、かうく
侍しをわすれて、今まで参らせ侍らざりける事とて、
御まへにまゐらせ給とて、やがてすこゝうちふきを
らさせ給をきゝて、命ぶのめのと、
笛竹のこのよをながくわかれに、きみがかたみ
のこゑぞこひしき。

朝録

一條宮にハ、御まへの櫻の、おそきことを、たまへより
はじめたてまつりて、こゝろもとなきことに、たほし

の給はすまきバ。土御門の御くし正光女殿、

さきさかむればつうな順時女や櫻ばなほかの見るら

ん人ふとまや弁のめのと、

れほかのさくらも志らずこれをたゞまつより

ほかのことしなけきバ、弁のめのと、そのごろ、さとに

まらづるに、三條の院のまへとわたれば、本だり、り

し松の木ず忍も、まここ色をりて、心ちよげなり。つ

いひぢにハ、何となき物志げら、はひか、りたれば、い

みじう哀にむりしねもひいでられて、小侍後の君の、

さとにあるよ、いひやる。くるまど、めたるほども、す

ぎてをかし。
むりし見し松のこず忍ハそれながらむぐらをか

むりし見し松のこず忍ハそれながらむぐらをか
この歌千載集ふあ

りて三條院のくれ
させ給てのちうの
院のちうさきけり
ふねの箱むおあし
さきよついでさき
ととらうくつれた
るにむくらのえけ
りたるとてその
うちふ江の侍後
侍りけるふつら
いけ。このまてこ
のうさあり

どをさしてけるかな。返しに、侍後のきみ、

君なくてあれまさりつ、むくらのみ、さすべきり

ど、ねもひかけきや。三月廿日のほどに、一條宮に、櫻

とまゐらせて、道命阿闍梨、

いかならんきりバやしでの山ざくら、思ひこそや

も君がゆりりよとあれば、中将のめのと、かへし、

君ゆゑいかなしきけさのにはひかないかなる喜

の花ををりけん。一條の宮にハ、四月つごもり三條院御服

ぬがせ給てしうバ、よろづあらたまりはなやかなり。

されどなほをなやりなる色いたてまつらば。五月五

日、小一茶院陽明門院より姫君の御かたにとて、くすだま奉らせ給へ

くすこま 茶むと
も候余端ともかき
て端午の日の祝ひ
物とすさまじくのも

衣をさげ花の形を
送り菖蒲ふまじへ
て袴ふけ又衣服
ももつけふとする
まう

この比をれもひいづきバあやめ草なるをなし
ねにやともみふ。御かへし。
いふへをかくるたもとへ見るごとよいといふあ
やめのねをそまけられ。九日の御正日よて御覽する
もいとあそれなり。はうなう。六月にもなりぬ。京極殿
へ、をどし。七月にやけにしを、その八月より、よる
をひるよてつくらせ給へれば、いできて、けふあすわ
たらせ給。大宮、うちにははしませば、殿のたまへ、う
へかんのとのわらせ給。伊與守頼光ぞすべてとの、う
ちの事、さなごら、つかうまつりたる。どの、たまへの
御てうごも、うへの御ぐがんのとの、御事などを
べて、のこる物なくつかうまつれり。女房のさうしの

うちあけ云く 頭
宗紀タナソニモヤ
ラ、ニウチアゲ玉
フ番トコヨサナと
ありまると稱て遊ふ
ふり酒宴のまじり
然
きぬや 膳
とたり

もそのぐ、藏人所、御隨身所まで、すべて、どの、うち
此物こそなけれと、思しの給はすべきやうなし。い
でう思よりけんともで御らんせらる、ぞいみじ
うめでたき。御帳、御几帳、御屏風の、ささま、厨子、辛櫃の
まさままき急おきくち、めつらうなるまで、つかうま
つれる、いかでかくまけん、と、殿もたほせられ、殿ばら
もかんど給。三日のほど、よろづのものをらまあり給
ひて、うちあけあそび給。御まへふきぬやつくりて、あ
めうしいたはりかはせ、つねのすといひながら、めと
ごめられたる、殿のつくりざまを、じめいこだいふむ
かしつくりなりしか、バ、やのたけいとみじかう、うち
あそぬすれほかりしを、このたびハ、殿の御心の、うち

をぞけ 恐るゝこ

松かぜい云く
うら後拾遺箱の
三小ありましきま
小一余院まねせは
よすに給ひてのこ
ろね風心まご吹

あふかぎりつくらせ給へれば、世ふいみじき見物な
り。山の松ほきなる本どもうせにしこそくちをき
まなれど、いまひきまうゑさせたまへる、小木のゆくす
ゑはるかよれひさきありて、たのもしき若枝松ほく、
みどころまさりてなむありける。どのハ、これにつけ
ても、枇杷どの、をぞけなることを松ほしめすべし。
いまハかれをいそがせ給。はかなく秋になりぬれば、
風のおともあハまよ、心ほそきにほり河の女御、松風
のおとをまごしめして、

松かぜいいろやみどりよふきつらんもの思ふ人
の身にぞ志みける。とれほさをけり。かやうにて、すぎ
もてゆきて、神な月にもなりぬ。いつうとばつ雪ふ

しをまきつてはこ
えり

内大臣の御むすの
云々 内大臣の漢
字あるべし 研子も
或子も共よな長女
居の女もれがあ
又音楽の奏にいま
ごあらじれあは
居の女もふり
ご子居て並せ
給ふるをたせ

りわたり、れいもにずいと、き事を人々けうど松
ぼすふ、二位中納言殿より一條宮よ、

ありがよくありつるけさのはつゆきを見けたぬ
人もあらせてしがな。とあれバ、返し命婦のめのと、
きえか、へりめづらしと見る雪なれば、ふりてもふ
りぬ心ちこそまれ。かくて、かんの殿ハ、この二月にこ
そ、参らせ給。この頃、后にた、せ給べきよしみの
の志りたり。よの人いうでか、さのみハあらむ。内大臣
の御むすめ后にて、ふたどころながらならばせ給へ
るため、なぐて、このころいみじきことに申めるに、
いざいかなるべきことにかハあべからんと、うちゆ
るぎかたぶきれもひいふく上下あるがし。さいぬ

りたりまいて三所
相まします小舎一
所をまき女内侍
云々こつるをまき
いあすすべし

三條
皇太后宮 嬪子
皇后宮 嬪子
後一條
中宮 感子
嬪子の濟時の女
よにめつりき云
々小右記云一家
ま子居未嘗有

志りどよき日志てのこるものか。寛仁二年十月十
六日、中宮後三位藤原威子を中宮ときこえさせ給は
どの儀式ありさまさきぐのれなごりなり。いま中
宮をば、皇太后宮ときこえさせ、内侍のかみ尚侍に、
いま嬪子ひめぎみならせ給ぬ。大夫に、權中納言能信の
君成給ぬ。つきくの宮司さまぐの様にきほひのぞむ
んくれほかるべし。いまいこだいのりなまご、かくて
三后のれはしませるをよにめつらきことにて、と
の、御さいはひ、このよのりなまごみえさせ給はず。この
れまへたちのれはしませあつませ給へるをりハ、
我めにみたてまつりあまらせ給てハ、たゞいまもの
見しり、いにへのりなまごえたらん人よもの、はざ

まより、かいはませ奉らばやとまでおほさき給は
せける。かくて霜月不成ぬ。大將殿の教通ひめぎみハ五、こ
ひめぎみハ三にならせ給ければ、御はかまきせた
てまつり給。京極殿に、わたらせ給て、西の對道長いみど
う志つらひるさせ給へり。殿のれまへ、御こハゆひ
たてまつらせ給。時なりて殿わたらせ給へり。大姫君
をみたてまつらせ給へば、御ぐせなかなをかりに
て、いみじうけだかうをかへげみ、たそします。小ひめ
きみハ、御ぐしふりわけにて、御かほつき、らうたげよ
うつくし。さまぐうつくしう見奉らせ給。ひめ君は、て
ても母もたれもく我をのみこそ思給へれ。小姫きみ
をば思給はぬぞかしときこえ給へば、なごきはある

西ふやのこと
小右記寛仁二年十
二月九日院は鳥所
平産云々とありは
鳥所、長女の女名
を政子と云ふ母ハ
高松のうへなり

にか。うばうりうつくしき人をとぞ、おぼしめしの給はせ
ける。さて殿の御おくり物よりをよめ、とのうちの
をとこ女、みあさるべきさまに志たがひつゝのこり
なく、何事もせさせ給へり。いみじうめでたし。そこよ
二日ハ、公柱女はして、よさりぞかへらせ給。こたみあかぬ
ことハ、大うへのおまよははしませば、そひてわたら
せ給はずなりにしことをぞぐちをしうたぼされた
る。君達の御めのこと、女房どもいみじう志たてさせ給
へりけり。かくて高松殿小一条御息所ハ、このころ御うぶやのこ
と有べうたぼしいそぎて、御いのりなどいみじかり
つればにやいとたいらうに、えもいはぬをとこ敦元みこ
うまもさせ給へり。院の御こゝちにも、さまじいとう

帝うぬく、必將
来の帝まらんと
いふこと

れう、たぼされたり。かひありてめでたし。七日の程
の御ありさま、帝がねといみじうかしづたきこえさ
せ給。よろづめでたき御事どもハ、おしはるべし。宮
宮よりも、関白殿よりも、みなあるべき事ども、いみじ
うせさせ給へり。女房のなりなどいみじうこのまじ
うて、七日もすぎぬ。心のどりに、たぼさるゝほどに、こ
のいまみや、御ゆよりあがらせ給て、にハかにとゞま
えにきえさせ給へば、御ものゝけよとて、加持しゆ
すりさよぐふよろづのものを、御誦經に志さよがせ
給に、志るしな。殿道長のたまへも、いそだわたらせ給へ
ど、すべてあさましう、つゆにてきえはてさせ給ぬ。
院のうちあさましう、心うきことにたぼしなげらせ

七宝 祇園浄土佛
撰受經云七宝者
一金二銀三琥珀
四頗眠五赤真珠
六阿濕摩揭拉婆
七年婆落揭拉婆

給へどかひなき。こゝろうくいみどきことをたぼし
めしてまたかうの中ふあへなきまなりつと、た
ぼしなげりせ給。院もいとうーと思へぬして、御あり
きもたえてこもりたはしませば、ほりかば正子のわさり
いとどうとくならせ給。ほり河の女御ハ、かゝること
を、さゞなるよりハ、くるしうきりせ給べし。殿にハ、此
ころ御八講せさせ給。んとて、よろづこたえハ、わが
たからふるひてんと、の給はせて、いまじき事どもせ
させ給。院のみこの御事あれど、これハさ様のことに
思しさはるべき。あらねば、いそがせ給。われも七
寶をつくさせ給。御捧物、みやく、殿ばら、いとみじう、
かねてよりせさせ給。つねのかゝる御事どもの中

せいせう 高二位
成忠の子なり

春の林より
西城記に上りて
樹木春天皇
々とてゆき
るも同出小深

式部卿 敦康親王
一条の第一の皇子

も、いみどうひびりせ給。清照せいせう、いみどうめでたう
つらうまつきり。御徑も御てづらから、せ給へれば
みやいみどうめつらかなること、いひつゝけた
めり。殿ばら、いとみじうきこめは、やゝ給。瑠璃
の徑臺ハ、靈鷲山の曉の空よりもあをし。黄金の文字
ハ上品上の春の林よりもきなり。などいみじうしも
てゆけば、どの、御まへ御はかしを御手づから給は
する程、たぼえありさまいはんかたなくめてた。せ
清照いせうのさいはひの、いみじきこと、是よつけでも、人
人の給あひける。五卷の日ハ、御あそびあるべく船の
樂などよろづその御ようい、かねてよりあるに、あす
とてのゆふかきこめせば、式部卿宮うせ給ぬと

の、しる。あなあさまし、こいりたるもぞ、ひごろな
 やませ給などいふ事もなりつるを、殿のたま
 へ、まづハ志りまゐらせ給へれど、むげにかぎりにな
 りはてさせ給ぬとあれば、あさましう、いみじうてか
 へらせ給ぬ。あすの御あそびとゞまりぬ。くちをいな
 がら、ひごろありて、御八講もしてぬ。返くいかなりつ
 る、ひごろの御有さまにかと、たぼしの給はまれどか
 ひなし。あさましう、心うかりける、人の御すぢかなど、
 ころづをかぞへつ、いみじうはづかしげにの、世
 の人申れもへり。帥中納言隆家さへ、はるかよればするを
 り、心うくとたぼしの給はす。誰なるも、こまらにつ
 かうまつるらんと、あはまに思きこえさする人、くた

うへの四方のゆ
 り云々 敦康親王
 の也と頼通の妻と
 ハ共一具平親王の
 女あり

ほり。源中納言経房ぞ、一品宮の御事も、つかうまつり給
 へば、よそなぐらも、さるべきさまにおきてつかうま
 つり給。又関白殿頼通ぞうへの御方のゆかりに、よろづあ
 つりひきこえ給。わかうれはしましつまど、御心のい
 とありがさう、めでたうれはしましつる有さまに、か
 くらへの御られたのゆかりとは、いひながら、ゆき
 きまでたぼしあつかせ給になん。一品宮脩子もあけく
 れの御對面こそなかりつまど、よろづにたのもしき
 ものに、たもひきこえさせ給へるに、心うくあさまし
 きると、たもほしまどはせ給て、我御身もありとの給
 はせ給。南敦康親王の院のうへいみじう、たぼしまどはせ給。ひめ

みやい、もとより関白殿の御子に、忘たてまつらせ給て、目ごろも彼殿にれはしましつれば、よくぞやりたてまつらざりけるとぞ思しのたまはせける。後一條内ももわうき御心なれど、いとあまれにき、たてまつらせ給。上東門院大宮はたいみじうあはれに思しなげかせ給ふ。さまぐの物ども、いとれほく奉らせ給つり。かうれば、まはにつけても、大宮いこたみの春宮の御事、あらましかばと、返こ心ぐるしう思聞えさせ給て、なげかせ給も、こらくならぬ。三條故院の御事を、たろうならぬ、れほしめ、きこえさせ給に、より、このみやくの御事をもかく思しめさるゝなるべし。故院のわたくし物に、思聞えさせ給つりし物を、あはきと思ひいできこえさ

春宮の内うらま
皇子の此取ま
宮あもとましの
まひーうよふこ
とり

せ給ふつけても、いみじうあはきに、れほしめさきて、御なみごととめがたう、なげかせ給も、なふありがき、御心ふかさをのみぞ。世のはうなきにつけても、道長のハなないうでほいとげあんとかん皇子の殿春宮にまゐらせたてまつることをせをやとのみ、世をあやふくればしめす。教康親王の妃みやのうへハ、やがて、この御いみのほどふ、あまになりなむと、れほしのたまへど。殿のうへもたゞ今さらでも、れはしましなんと、思し申させ給。具平親王後室あまうへも、あるまじき事に、れほしたまへ、くちをしうればさる。修子一品宮、いづももの心ほそくればさるらんとて、内より、も、犬みやより、も、つねに御せうそこ聞えさせ給つり、いまハ内に、れはしまさせんとぞ、れほ

ほい、びん 出家
入道の御意とびん

女御 顯光女元子
をトめ一條院の女
は、後ふ親定かよひ
たまへり於定ハ為

しのたまはせける。はかなく寛三年もくれぬまど、宮の御
事をうへハつきもせむれば志たり。二月ついたちこ
ろにぞ御法事あるべりりける。法興院に、故関白との
のべちふたてさせ給へりし御堂も、やけに一のちハ、
またつくらせ給はねば、たゞ法興院にてぞせさせ給
ける。なにもも、大宮心もとならず、おしはうりとぶ
らひ聞えさせ給へり。あはたどの、北方、あまよふより
給て、いまハ中宮道兼ノ女の姫君に、さるべき所たてまつらせ
給へれば、そこふわたり給て、ひめまきの、御あつうひ
をのこぞ志給ける。ほりうそのれとハひこりす
よて、世中の哀にこゝろほそきまをればすべし。女御元子
ハわたり給つゝ、すませ給へむ、源宰相頼定のいでいりし

平親王の男なり

関白との、
為平親王の女にて

給ふこそたのもしき御ありさまなめまども、もとよ
り、御中ふろしからざりしうバ、御對面も、たはやす
らば、たぼつかたげのみなん。この堀河の院を、は
じめ、この女御元子にたてまつり給へりけまど、宰相の
ことのおちハ、院小一條の女御延子に奉り給へりけま。一條院ふ
志ろしめしてつくらせ給へりしところなれば、院の
女御延子ハえしり給はじと、大み上東門院やなどこゝろよせまこ
えたまふやうにまゝ侍しかバ、世の人、大宮の御心よ
せをぞ、おづらはしげふ申めりし。源宰相をもいとこ
どのほりに、たもひまきこえさせ給べき人かハ。故為平式部
卿の宮のいみじき物なればしたりしうちにも、たゞ
いまの関白頼通との、あまうへハ、御いもうとふれはし

具
り
み
の
か
を
懸
通
み
嫁
せ
し
なり

ませば、いとねがえありてこそ、ねはすめれ。なのめに
てもありぬべりし、御事どもの、あまりけさやかな
りし程に、かくこの御中もあるなめり。院の御ありさ
まの、ことのはらよ、ならせたまへるを、たゞなるより
はらきしうねがしめさるべかめるも、人の御はらか
らこそ、心うきもの、いあれとぞ、世人きこゆめりし。

標
注
榮
花
物
語
抄
卷
三
終

